

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第39集

う わ ま ん ば い せ き
上 万 場 遺 跡

1 9 9 2

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

県境の町、東加茂郡旭町は、矢作川が愛知県に流れ込む最初の市町村として知られております。近年、アウト・ドアライフが注目を集めるにつれ、休日には近郊の市町村から、溪流釣り、キャンプなどを目的とした観光客も訪れるようになってきております。

上万場遺跡は、旭町の北部に所在する縄文時代を中心とする遺跡として知られております。このたび（財）愛知県埋蔵文化財センターでは、県道瑞浪～大野瀬線拡張工事に伴う事前事業として、浅谷地区に所在する上万場遺跡の発掘調査を愛知県の委託事業として実施致しました。その結果、三河山間部に生きた先人の生活・文化に関するいくつかの貴重な知見を得ることができました。そして今回、これらの成果をまとめ、ここに報告書を刊行するにいたりました。本書が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに存じます。

なお、文末で恐縮ではありますが、発掘調査の実施にあたり、地元旭町の方々をはじめ、関係諸機関及び関係者から、多大なご指導とご協力をいただきましたことに対して、深く感謝を申し上げる次第であります。

平成四年 早春

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

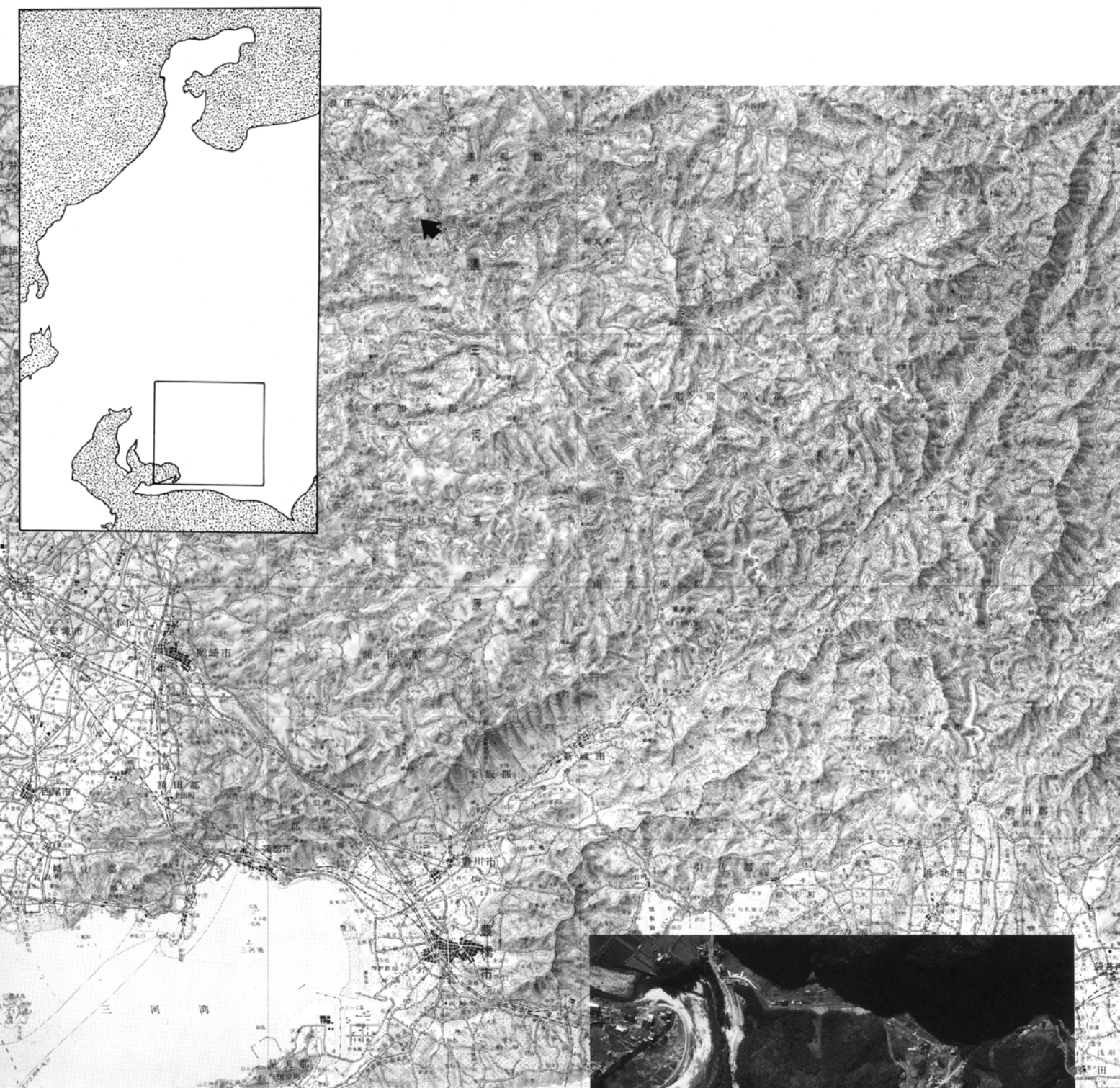
理事長 高 木 鐘 三

目 次

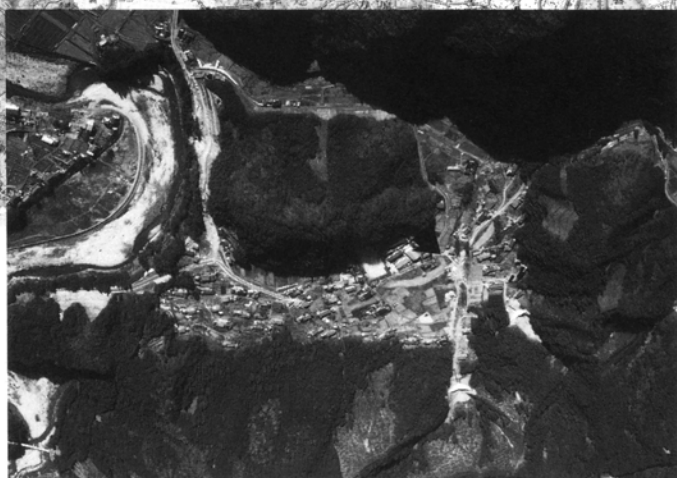
序		図 8 土坑 A・B	9
例言		図 9 谷地形	10
		図10 S B02	11
第 1 章 はじめに	1	図11 掘立柱建物・棚	12
(1) 調査の経緯と経過	1	図12 土坑列	13
(2) 位置と地形・環境	3	図13 近世陶器	20
		図14 弾丸	22
第 2 章 遺跡	6	図15 S B01土坑 1 遺物出土状況	24
(1) 基本層位	6	図16 古井式土器	25
(2) 遺構	7	図17 大野吾遺跡出土遺物	26
① A期の遺構	7		
② B期の遺構	10	図版目次	
第 3 章 遺物	14	図版 1 遺構図①	
(1) 土器・陶器	14	図版 2 遺構図②	
① 縄文時代の土器	14	図版 3 遺構図③	
② 弥生時代以降の土器	19	図版 4 土器①	
(2) 石器	21	図版 5 土器②	
(3) 金属製品	22	図版 6 土器③	
		図版 7 土器④	
第 4 章 まとめ	23	図版 8 土器⑤	
参考・引用文献	28	図版 9 土器⑥	
付表	29	図版10 土器⑦	
		図版11 土器⑧	
挿図目次		図版12 石器	
		図版13 石器・銭貨	
図 1 調査進行表	1	図版14 A・B区全形	
図 2 調査区位置図	2	図版15 C・D区全形	
図 3 上万場遺跡と周辺の遺跡	3	図版16 A・C区	
図 4 大砂遺跡第 1 号竪穴住居	4	図版17 S B01・02	
図 5 浅谷の風景（左）・浅谷城（右）	5	図版18 土器	
図 6 層位模式図	6	図版19 土器・石器・銭貨	
図 7 S B01			

例言

1. 本書は愛知県東加茂郡旭町に所在する上万場遺跡(『愛知県遺跡分布地図(Ⅱ)』による遺跡番号は69032)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は愛知県土木部が進めている県道瑞浪～大野瀬線の拡幅、線形変更に先立つもので、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じ委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成2年4月～9月である。
4. 発掘調査は福岡晃彦(本センター課長補佐・現愛知県立東浦高等学校)・池本正明(本センター調査研究員)・尾野善裕(本センター嘱託員・現名古屋市見晴台考古資料館学芸員)が担当した。
5. 調査に際しては、次の機関から指導・協力を受けた。
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県土木部・旭町教育委員会
6. 遺物の整理・製図などについては、次の方々の協力を得た。
市川浩代・加藤ちか子・河野実佳子・佐野香恵・清水真理子・中山記久子・成瀬弘子(五十音順・敬称略)
7. 本書をまとめるにあたっては、以下の方々にご教示、ご協力を得た。
天野暢保・伊藤英晃・奥川弘成・神谷友和・川野典夫・斉藤弘之・斎藤基生・斎藤嘉彦・鈴木昭彦・鈴木茂夫・夏目和之・野口哲也・林順一・三宅唯美・若尾正成(五十音順・敬称略)
8. 調査区の座標は、建設省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
9. 本書の執筆・編集は池本正明が担当した。
10. 調査に関する資料はすべて愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。



この地図は国土地理院発行
20万分の1地勢図「豊橋」を使用したものである。



第1章 はじめに

(1) 調査の経緯と経過

愛知県土木部では、平成元年度に入って県道瑞浪～大野瀬線の線形変更及び拡幅を目的とした工事を計画した。この新路線の東加茂郡旭町大字浅谷（あざかい）地内の予定用地は、浅谷の集落を土砂崩れなどの災害から保護する目的をもっているため、現在の路線のやや北、宅地の集中する部分の山側に、現地表面を数m掘削する形で設計された。ところがこの部分には、縄文時代と鎌倉・室町時代の集落遺跡である上万場遺跡が所在しており、その取り扱いについて愛知県教育委員会と計画設定した愛知県土木部との間で協議がもたれた。その結果、事前に記録保存の措置をとる必要性が認められ、遺跡の発掘調査が工事に先立って行われることとなった。発掘調査は、愛知県埋蔵文化財センターが愛知県土木部からの愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。今回報告する上万場遺跡の調査報告書は、この成果をまとめたものである。

発掘調査は平成2年度に実施し、第1図に示すように4月から9月までの6ヶ月間を要した。調査区は、遺跡の中央に所在する谷地形を境界として大きく東西に分け、さらに廃土処理などの関係でそれぞれを二分して実施した。各調査区の名称は、中央の谷地形より東部分をA・B区、西部分をC・D区とした（第2図）。調査区の総面積は4500㎡である。

調査方法は現地表面から表土のみをバック・ホウにより除去したのち、建設省告示によって定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠した5mグリッドを設定し、手掘りで包含層を掘削し、遺構を検出する方法をとった。それぞれの調査区に要した日程などは第1図に示した工程による。遺構の測量については、ヘリコプターによる航空写真測量を実施し、調査区全面の1/50の基本平面図を作成したほか、重要部分については補助測量図を手計りにより実施した。

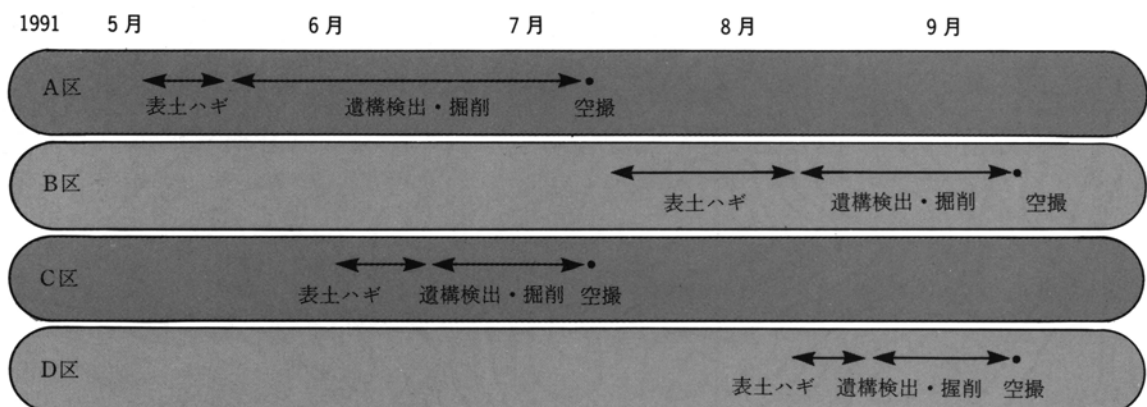


図1 調査進行表

なお、調査参加者は以下の通りである。

池野好美・井口甲子・石垣多美子・伊藤嘉一・伊藤三郎・伊藤ちあこ・稲垣勝美・稲垣きの江・稲垣甲・稲垣とき・稲垣ハク・稲垣峰子・枝木守・大加正之・大加ひさの・影山和恵・近藤兼喜・佐々木多鶴子・鈴木幹男・鈴木洋子・竹口登美子・中加美代次・津田栄・土井ツヤ子・中根京子・中根達郎・平田輝光・藤垣淑代・藤垣正子・藤垣ミドリ・松井吉男・三輪常三・山崎勲・横幕千代子・横幕秀夫（五十音順・敬称略）

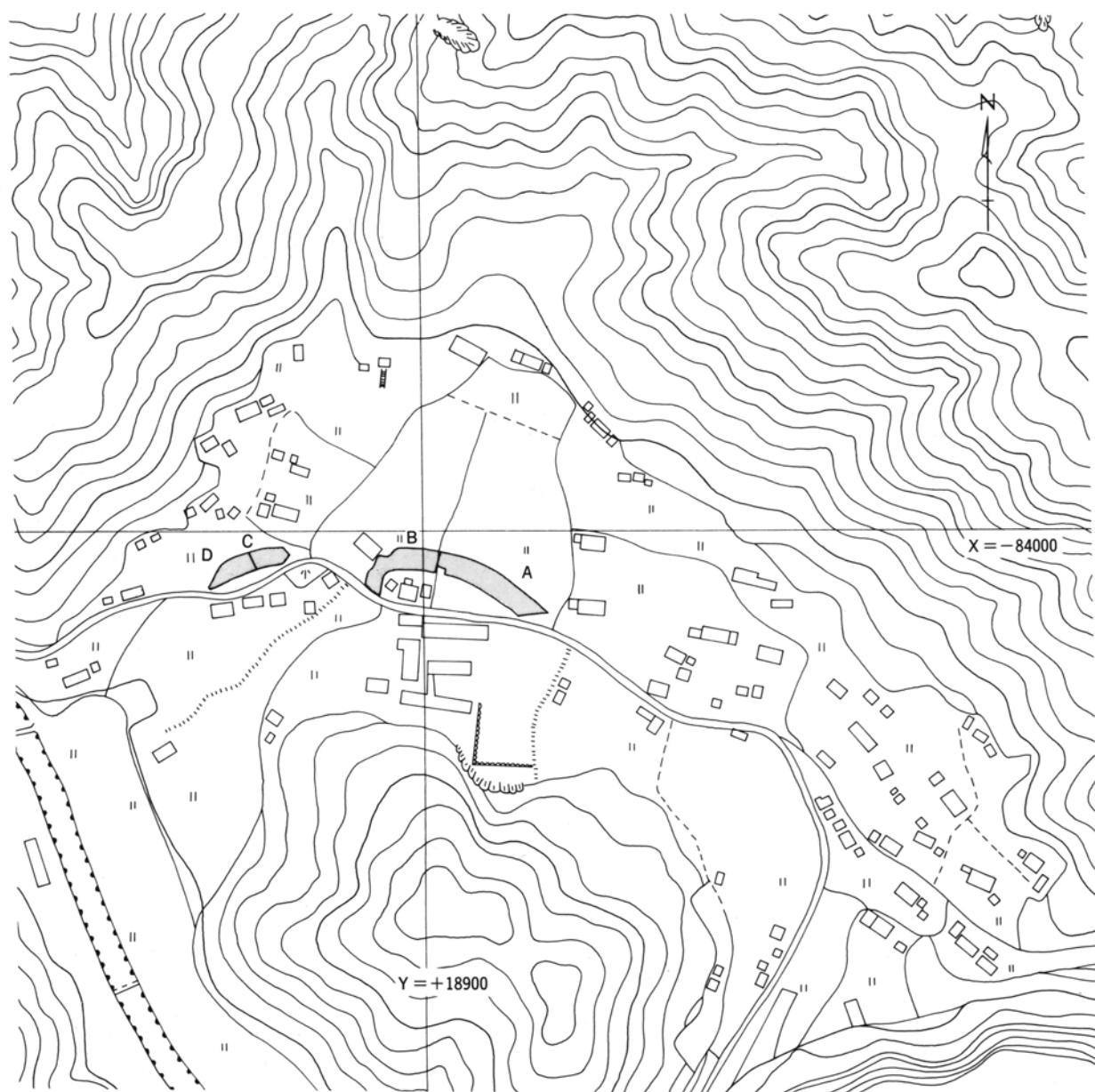


図2 調査区位置図 ($S = \frac{1}{5000}$)

(2) 位置と地形・環境

愛知県東加茂郡旭町は、北側を岐阜県恵那郡明智町・串原町と接する県境部に所在している。全体の景観は森林が80%を占める「山あいの町」で、東は北設楽郡稲武町、南は東加茂郡足助町、西は西加茂郡小原村と接している。

次にこれを地形的に眺めると、いわゆる「三河高原」の西北端に位置し、第三紀鮮新世地形に形成された三河小起伏面にはほぼ該当する。比高差750mにも及ぶ起伏にとんだ現在の地形が成立した原因は、三河小起伏面が侵食作用により多数分断された結果によるものである。そして、この分断線上には、矢作川とこれに合流する段戸川・阿妻川・明智川・介木川・大坪川・阿摺川などの小河川が発達し、これらの沖積作用により、各所に小規模な平坦地が散在する現在の地形が成立したようである。現在の集落や耕地の多くは、この平坦地を

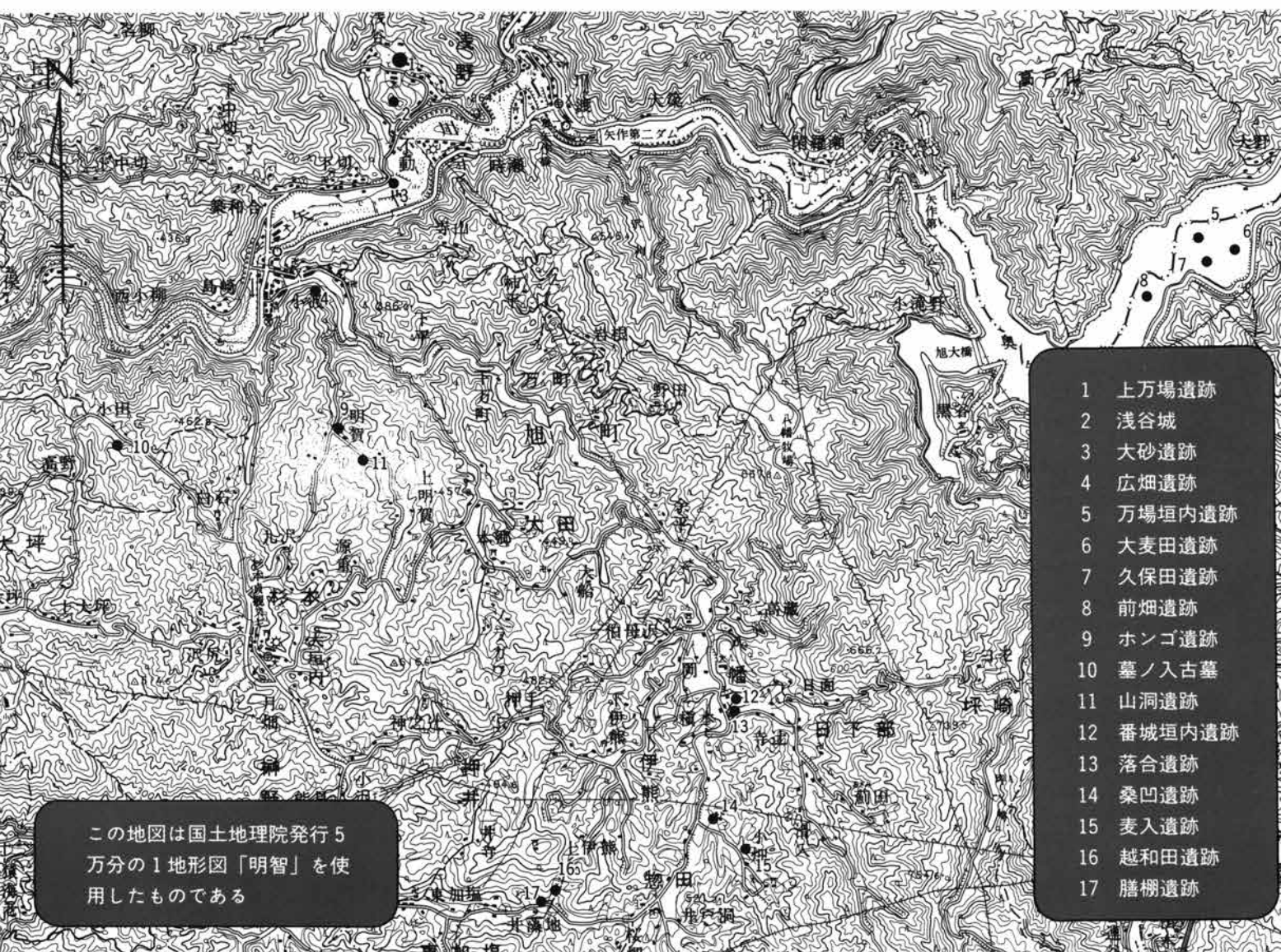


図3 上万場遺跡と周辺の遺跡

中心に発達している。

上万場遺跡の所在する「浅谷」は旭町の北部に位置し、阿摺川が矢作川に合流する500m上流の右岸側において、細長く広がる面積10万㎡にも及ぶ緩やかな傾斜地帯に立地している。この緩斜面は北東に所在する山塊の花崗岩類が崩壊・再堆積した結果生じたもので、現在の地目は畑地もしくは宅地である。上万場遺跡はこの緩斜面の一角に所在し、標高は230mをはかる。現在の地籍は、愛知県東加茂郡旭町大字上万場462-1であるが、この地籍は「浅谷」が昭和30年に岐阜県恵那郡三濃村から旭村（現在の旭町）に越県合併した結果である。なお、周辺の公共建築物としては「浅谷」地内の東加茂郡旭町立浅野中学校、南西2kmに旭町役場がある。また、南方500mの県道豊田～明智線には東濃バス小渡線の停留所『浅谷』がある。

周辺の遺跡 次に上万場遺跡の周辺の遺跡について概観する。旭町には上述した河川の沖積作用によって形成された平坦部を中心にいくつかの遺跡が確認されている。このうち最古の部類に属するものは旧石器時代にまで遡る。具体的には、膳棚遺跡(69083)・広畑遺跡(69080)・桑凹遺跡(69073)などで、前期に属する可能性を持った礫器を採集されているほか、越和田遺跡(69082)・山洞遺跡(69081)では尖頭器も採集されている。

次の縄文時代では遺跡の数も増大し、旭町内では39遺跡でこの時代の土器・石器などが採集されている。なお、これらの中には調査によってその状況が比較的明らかにされている事例がいくつか知られている。まず、現在の矢作ダムに水没した大麦田遺跡(69045)・前畑遺跡(69042)・万場垣内遺跡(69043)・久保田遺跡(69044)は、昭和42年に矢作ダム建設工事の事前事業として発掘調査が実施され、中期を中心とした竪穴住居数棟も検出されている。また、大麦田遺跡については前期の良好な資料が出土し、大麦田式の基準資料として著名である(吉田他 1968)。また、昭和55年以降からはじまる圃場整備事業に先だって、広美遺跡(69071)・麦入遺跡(69074)・落合遺跡(69062)・ホンゴ遺跡(69015)・大砂遺跡(69037)などの調査が実施され、縄文時代の各時期にわたる遺物を多数出土してい

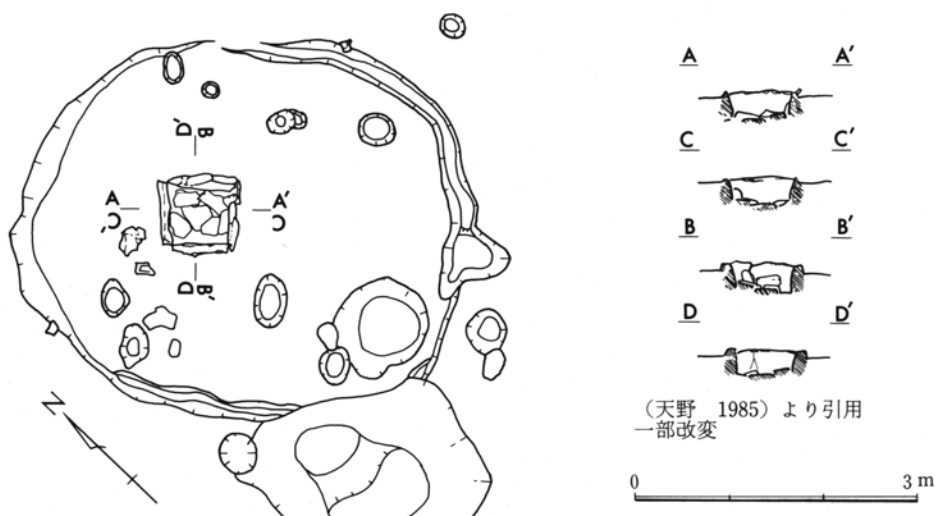


図4 大砂遺跡第1号竪穴住居址

る（伊藤他 1979・天野 1982 a）。このうち最もその様子が判明している大砂遺跡では、中期の竪穴住居 5 棟や環状配石遺構、晩期の土器棺などが知られている（天野 1982 b・同 1985）。このほか、番城垣内遺跡（69061）では、昭和45年の宅地造成工事中に中期の竪穴住居が検出されている。

弥生時代～古墳時代の遺跡は乏しくいくつかの遺跡で数点もしくは数十点の土器片などが採集されているにとどまり、詳細は明らかにはできない。なお、前述の久保田遺跡から弥生時代前期に属する土器が出土している点は注目される。

次の奈良・平安時代では遺跡の数がやや増加する傾向がうかがえるが、具体的には前述した万場垣内遺跡第 6 地点の礫群（平安時代）や落合遺跡の竪穴 1 号遺構（奈良時代末～平安時代前期）など、性格が限定できない遺構が若干知られるにすぎない。なお、ほぼこの時代に属する彫刻として、大字楨本に所在する常幅寺に安置される木造観世音菩薩（愛知県指定文化財）がある。

中世にはいと遺跡数が増大し、多くの遺跡から灰釉系陶器・施釉陶器などが採集されている。ただし、具体的な調査事例は乏しく、墓ノ入古墓の調査報告書が刊行されているのみである。報告書によると、検出された遺構は、直径 7 m、短径 3.3 m の片方が締まる卵形の範囲に拳大～人頭大の石が集中するもので、集石墓の形態をとるものと考えられている（鈴木 1982）。また、城郭関係の遺跡もいくつか知られている。これらについては武田信玄の三河進入により落城したことを伝承するものが多いようである。ただし、詳細は明らかにはされていない。なお、このうち上万場遺跡に近接したものとしては、遺跡の南方に所在する小丘陵頂部に浅谷城が位置している。

注 1 本遺跡の名称であるが、従来これを「カミマンバ」と読む場合があったが、大字浅谷字上万場、同下万場の在住者はこれを「ウワマンバ」と読むことから、本報告書もこれに従っている。

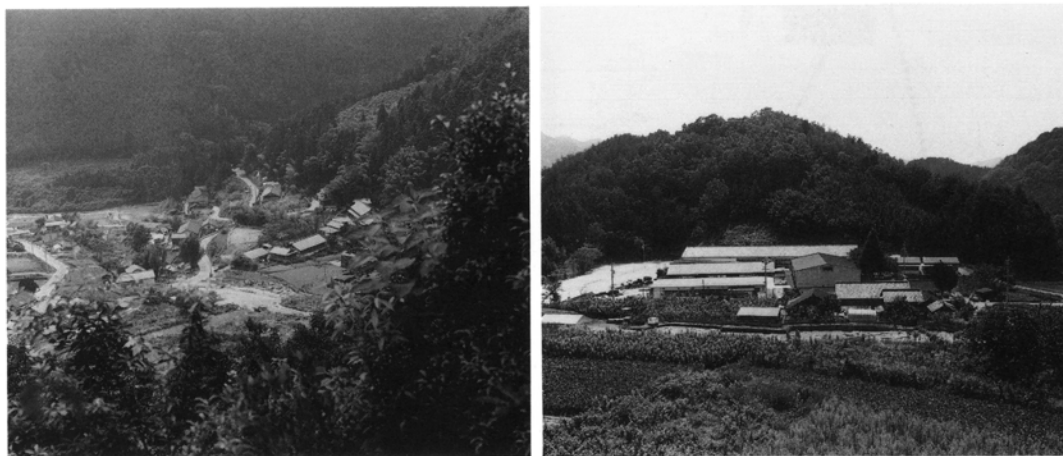


図 5 浅谷の風景（左）・浅谷城（右）

第2章 遺 跡

(1) 基本層位

今回設定した調査区の基本的な層位は、黒褐色土層（1層）、褐色土層（2層）、黄褐色土層（3層）である。

- 土層の特色**
- 1層 基本的には遺跡の覆土。全体に軟質で、厚さはほぼ60cm程度。大小の花崗岩礫を含むが、これらの頻度によって上部と下部に区分できる。縄文土器片や、中世～近世の陶磁器片などに混ざって、現代のビニール片などを含む。
 - 2層 厚さは10cm程度で、調査区全域に分布しない。いわゆる遺物包含層で、炭化物、焼土ブロックのほか、花崗岩礫や3層ブロックなども混入する。
 - 3層 厚さは不明。洪積層で上面が遺構検出面となる。風化花崗岩の再堆積層で、黄褐色を呈するがやや赤味を帯びる部分もみられる。

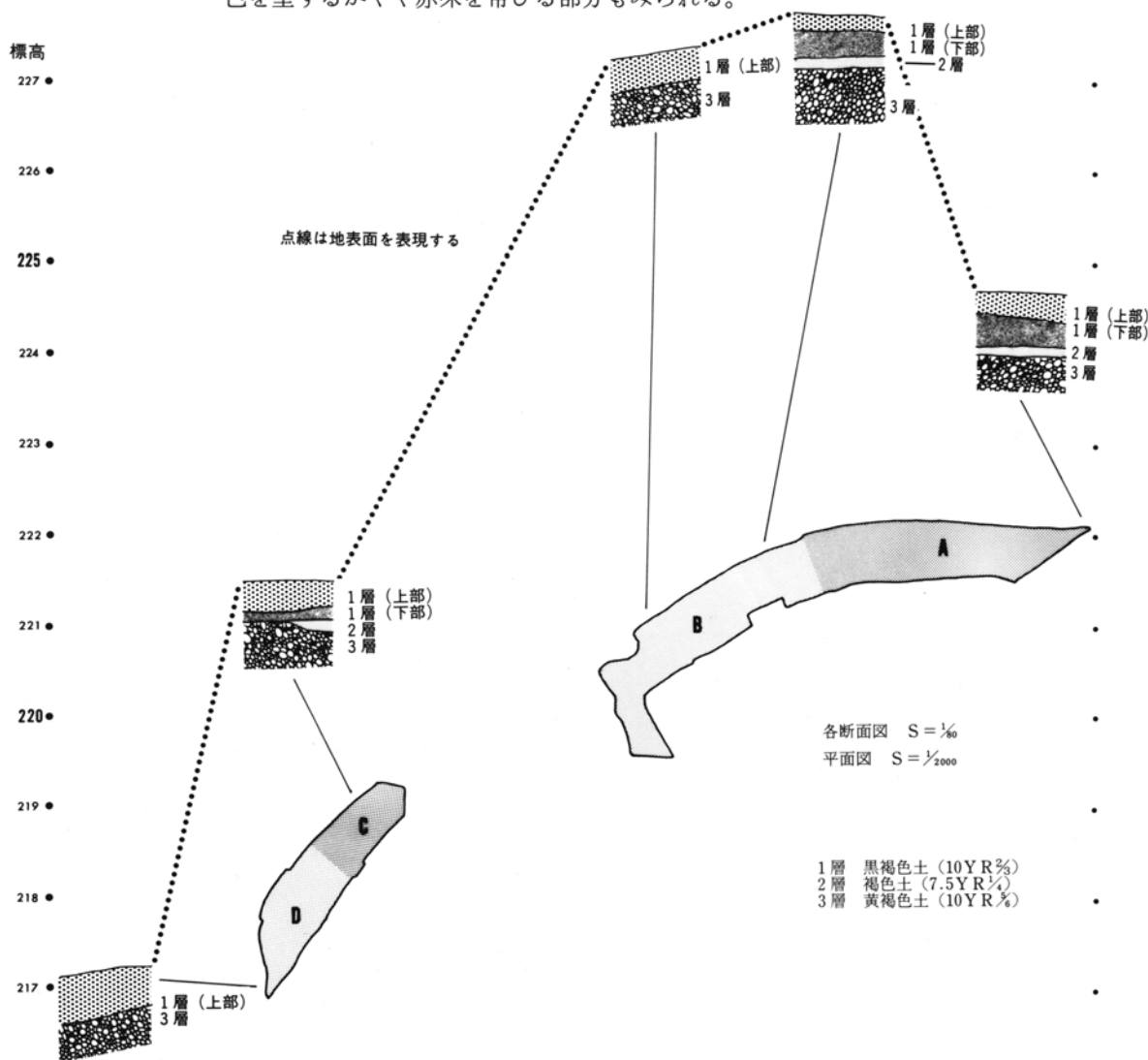


図6 層位模式図

(2) 遺構

今回の調査で検出できた遺構は、縄文時代から中世にまで及び、竪穴住居・掘立柱建物・柵・土坑などがある。これらを時代別にみると、各時期数例を数えるに留まり、それほどまとまりを持つものではない。全体的な分布状況は、B区北側のややフラットな部分で密になる傾向がうかがえる。

以下、各遺構について具体的に説明を加えるが、記述の煩雑さを避けるため、本遺跡の時期区分中心となる縄文時代の遺構とそれ以外とを分け、前者をA期、後者をB期として進めて行くことにする。

① A期の遺構（縄文時代の遺構）

A期に層する遺構は、竪穴住居1棟・土坑数十基がある。

竪穴住居

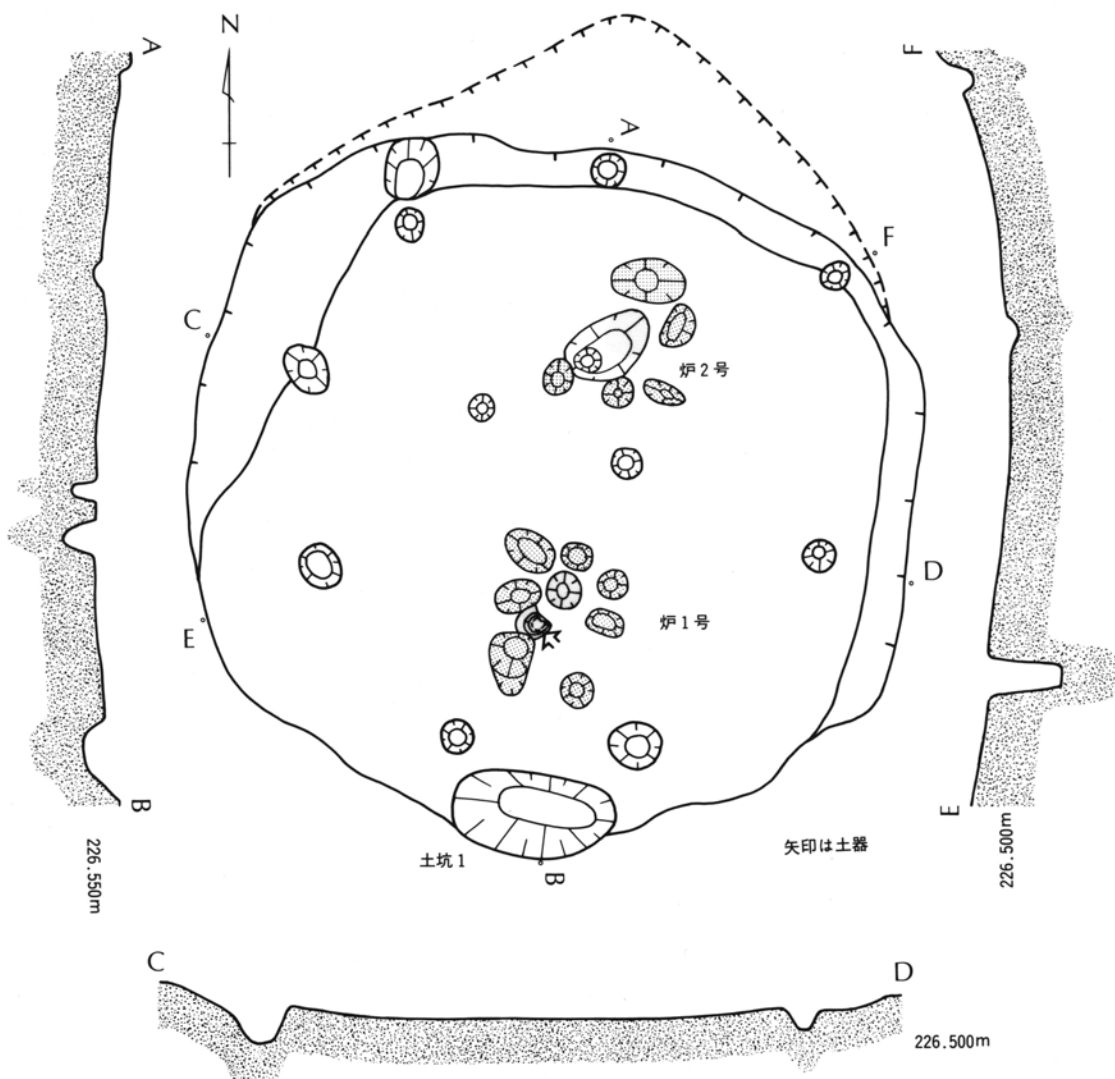


図7 SB01 (S=1/100)

S B01

縄文時代の 縦穴住居 A区で検出されたもので、直径4.5m程度のややつぶれた円形プランを有する。北側が攪乱により削り取られているが、ほぼ全形を検出できた。周囲には柱穴が巡る。8か所確認できた。中央には焼土の分布範囲(図7中の細かいトーンで表現した部分。)が2か所に認められ、炉になるものと考えられる。いずれも周囲には直径20cm程度の小土坑がこれを取り巻いており(同、粗いトーンで表現した部分。)、これらの小土坑を石の抜き跡と判断するのであれば、石囲い炉であったことが予想できる。埋土中からの出土遺物は35・49・88・226・227である。なお、炉1号では、中央に深鉢(同、矢印で位置を表現 64)を埋め込んでいる。また、南側には、直径1.0m、深さ0.6mの土坑(S B01土坑1)がみられ、埋土中からややまとまって遺物(50・64・224)が出土している。

土坑

今回の調査で検出した土坑のうち、縄文土器、石器などが出土したことを根拠とするならば、A期の遺構としては最も数量が多い。ただし、これらは明確な共通性が不明確なものが多い。ここではこれらのうち特に特徴的なものを形態的にみて次の通りA～Cに分類し、記述する。

土坑A (S K05・06)

長径70cm程度をはかる楕円形のプランで、やや深い掘形を有する形態。A区から2基検出された。北側部分に拳大の礫が集められていることが最大の特徴となる。なお、これらの礫および周辺の壁面には若干の被熱が認められる。出土遺物は得られず、時期決定はむづかしいが、埋土などの状況からA期に含めている。

土坑B (S K10・13・48)

縦穴住居に類似したプランを持つ形態。3基検出された。いずれもA・B区に存在する。プランは円形または不整形。なお、S K10からは石皿(236)、S K13からは人頭大の礫が出土している。

土坑C (S K61)

D区において検出したもので、大型の細長い土坑である。埋土は、3層の再堆積土を主体としたもので、上方では2層が若干加わる。性格は明らかではない。埋土中から打製石斧(212)が出土している。

谷地形

自然地形 自然地形ではあるがここで扱う。C区で検出された。崩壊による危険性を考慮し、検出面より下方2m以内の調査に留めたため、最深部は検出していない。C区の50%程度占める大形の谷地形で、さらに調査区の西側へと延びている。南側には幅1.2m程度をはかる溝状の浅い落込みがみられ、谷地形の埋没がやや進んだ段階ではここに緩やかな水流が存在したことも考えられる。完全埋没の時期は判断できないが、埋土はいずれも粘土で占められていることから、長期にわたる堆積期間を考えることができる。なお、埋土中からは、検出面より下90cmに存在する黒色土層から弥生時代中期に属する土器(154・160・162)が

ややまとまって出土したほか、最下層からは縄文土器の極小片が採集されている。

②B期の遺構（歴史時代の遺構）

B期に属する遺構は、竪穴住居1棟、掘立柱建物8棟、柵4条、土坑数十基がある。

竪穴住居

S B02

C区南西部で検出されたもので、プランは東西4.2m×南北3.5mと、長方形を呈するが、南側にやや拡大する可能性も考えられる。床面には4本の主柱穴と、その中央に炉が設置されている。炉の具体的な構造は、長径70cm程度の卵形の土坑中に土師器長胴甕の体部片を円形に並べて埋めたやや特殊な形状で、上面は被熱している。S B02の時期は、炉に転用された土師器長胴甕片の存在からほぼ古墳時代後期頃と判断できる。

掘立柱建物

確認し得たのは8棟にすぎないが、遺構の検出面が風化花崗岩の再堆積土層であることが原因して、調査区内にはなお検出し得なかったものが残存する可能性も考えられる。いずれも小規模で、柱通りがわるい。柱穴は直径30～40cm、プラン円形を原則とする。主軸はまちまちで、ほぼ自然地形に平行ないし直行して設定されている。分布状況は、B区北側のややフラットな部分に集中する傾向がある。帰属時期についての明確な情報は少ないが、S B06の柱穴からは灰釉系陶器（174・197）、施釉陶器（201・202）などが出土している（図10に出土柱穴および遺物番号を表示。）ので、おおむね中世と考えられる。

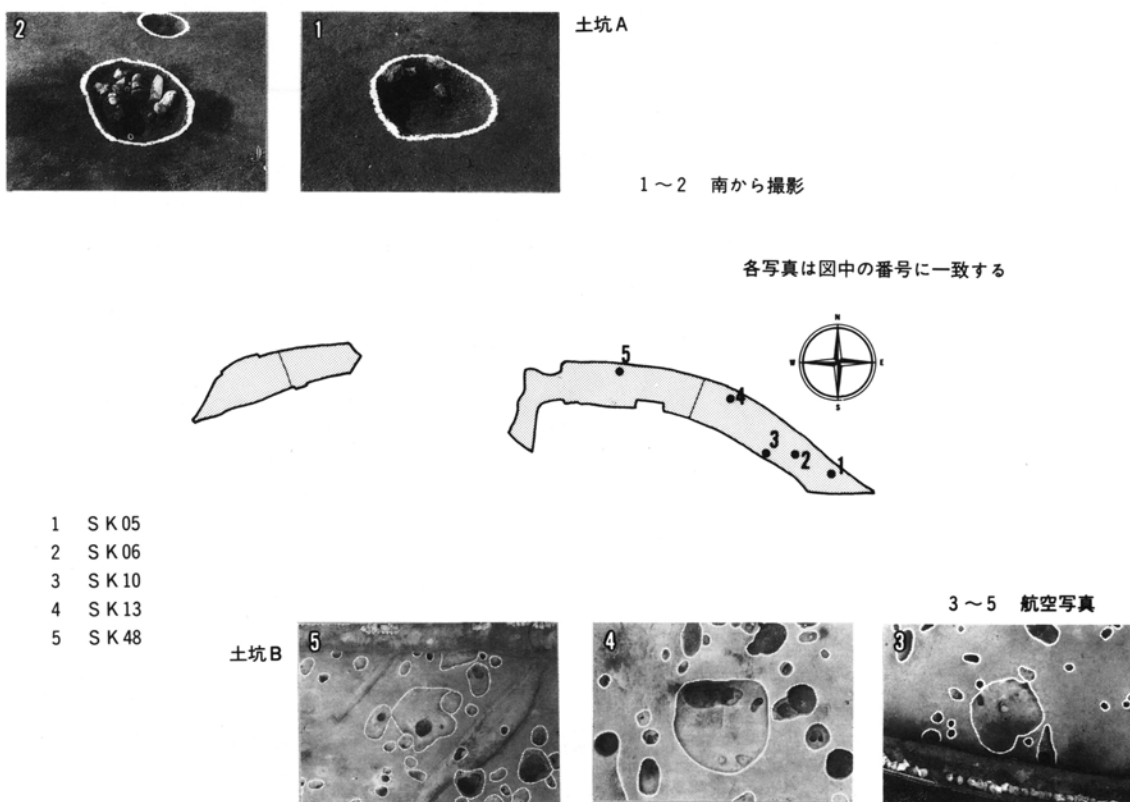


図8 土坑A・B

S B03

柱通りのわるい小規模な建物で、桁行を地形に平行させる。主軸は $N-6^{\circ}-E$ 。柱穴数は7基。出土遺物は得られなかった。

S B04

S A03に桁行を平行させる。主軸は $N-89^{\circ}-E$ 。柱穴数は7基で、北東隅の柱穴は未検出。出土遺物は得られなかった。

S B05

南面は後世の遺構により削平される。主軸は $N-26^{\circ}-E$ 。柱穴数は7基。出土遺物は得られなかった。

S B06

調査区の南側にさらに延び、全形は確認できない。所在地点は、ベースのレベルがやや高く、周囲を削平することで低い基壇状の平坦面を作り出している可能性が考えられる。近接して2棟の掘立柱建物が確認でき、それぞれ主軸がほぼ一致していることから、これを建て替えと理解した。古い段階のものをS B06A、新しい段階のものをS B06Bとする。S B06Aは、梁行3間、桁行3間まで確認した。ただし、ベースの高まりの状況から判断して、梁行については3間であったことが予想できる。主軸は $N-40^{\circ}-W$ 。柱穴数は6基。北東隅の柱穴は検出されてはいないが、S B06Bの北東隅の柱穴によって破壊されている可能性がある。S B06BはS B06Aと比較すると、主軸がやや北西にずれて設定されている。柱穴は他の掘立柱建物のものよりも深い。梁行3間、桁行2間まで確認した。主軸は

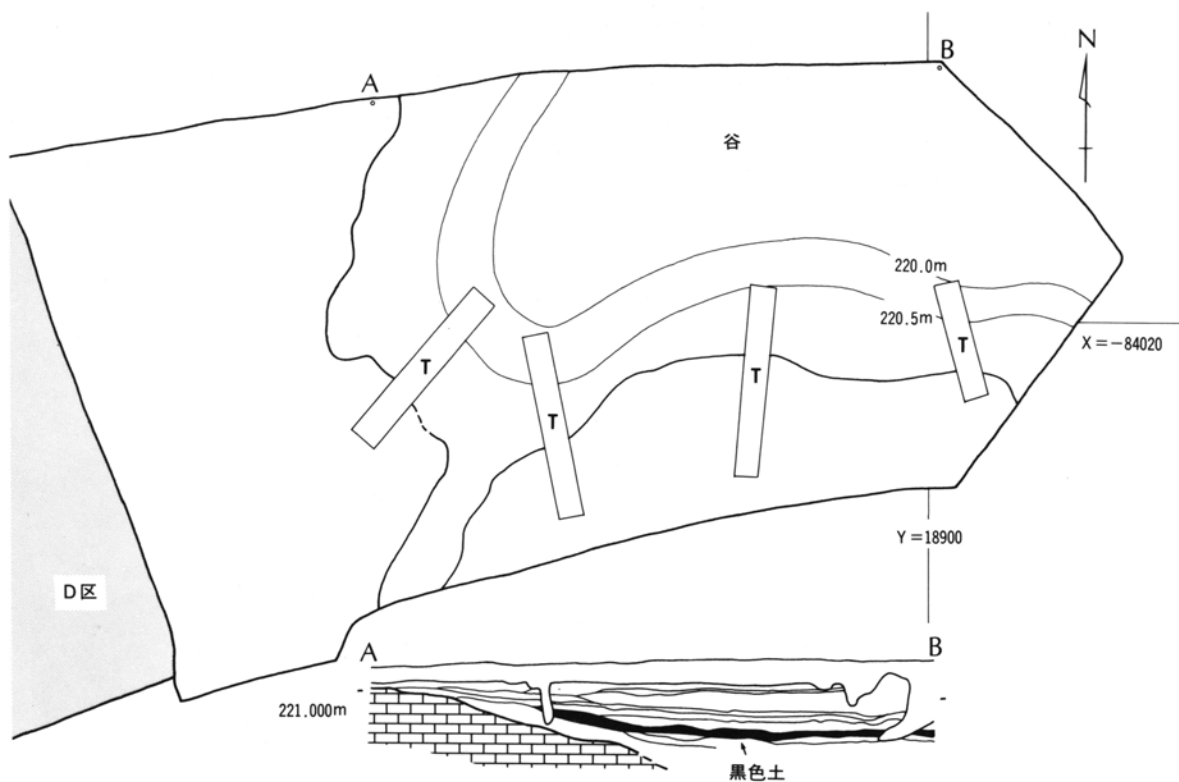


図9 谷地形 (S = $\frac{1}{200}$)

N-39°-W。柱穴数は6基。

S B07

調査区の東側にさらに延び、全形は確認できてはいない。梁行3間まで確認している。

主軸はN-50°-W。柱穴数は6基。出土遺物は得られなかった。

S B08

S B07に近接して築かれている。柱穴数は9基。主軸はN-54°-W。出土遺物は得られなかった。

柵

検出できたのは4条である。全て掘立柱建物に接して存在し、これらと関連するものと考えられる。いずれも土器極小片を除き出土遺物は得られなかった。

S A01

A B区の境界付近に南北に設定される。南北それぞれ調査区外にさらに延びる可能性を有する。柱穴数は8基。主軸はN-21°-E。各柱穴の中心部分から計る柱間は、北から1.9m・2.3m・1.9m・1.4m・2.1m・1.7m・1.8mで、総延長は13.4m。

S A02

S A01に直交する形で東西に存在する。柱穴数は7基。主軸はN-69°-W。各柱穴の中心部分から計る柱間は、東から1.0m・1.9m・1.8m・1.5m・1.7mで、総延長は6.9m。

S A03

S B04の桁行に平行する形で、東西に存在する。柱穴数は8基。主軸はN-89°-W。各柱

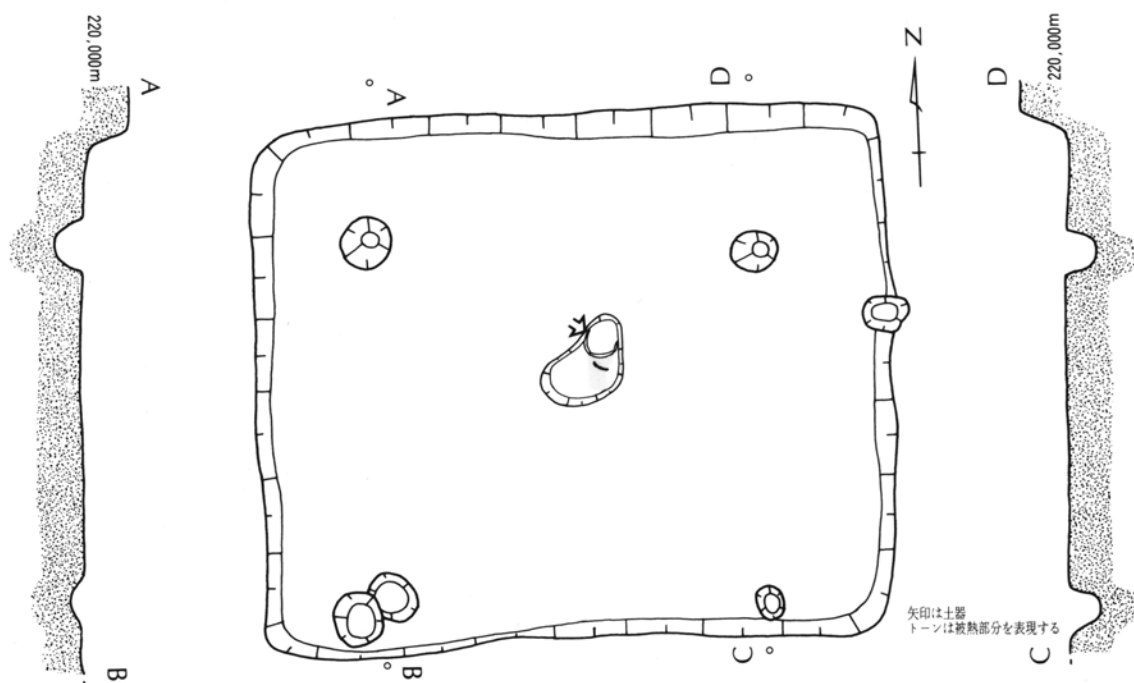


図10 S B02 (S=1/100)

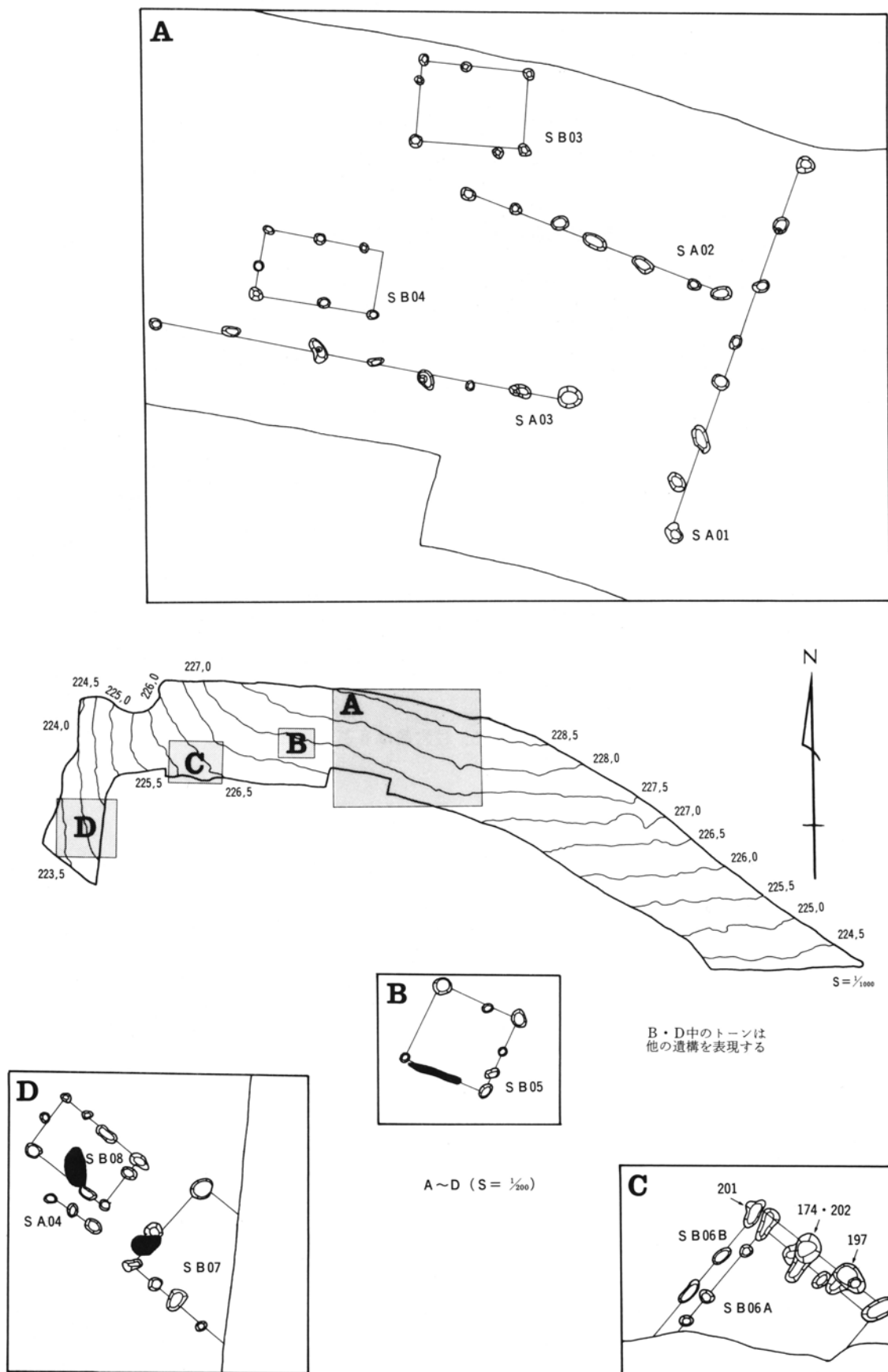


図11 掘立柱建物・棚

穴の中心部分から計る柱間は、東から1.6m・1.8m・1.7m・1.7m・1.9m・3.0m・2.5mで、総延長は14.2m。

S A04

S B08の桁行に平行する形で東西で存在する。主軸はN-54°-W。各柱穴の中心部分から計る柱間は、東から0.9m、0.8mで、総延長は1.7m。

土坑

今回の調査で検出した土坑のうち、灰釉系陶器などが出土したものをB期に含める。B期の遺構のうちでは最も数量が多い。ただし、これらは明確な共通性をもたない。それぞれの規模などについては付表に示した。

土坑列

土坑列は検出面でのプランが円形ないし長楕円形を呈し、間隔数10cm程度または、接して列を成すものである。いずれも埋土が非常に軟質であることから考えると掘立柱の柱穴である可能性は低く、その性格は明確ではない。埋土中に中・近世の陶器が含まれる（図示できたものは192・207・208）こと、現在の畑区画と土坑列の軸線が一致していることなどからすると、前述の掘立柱建物・柵とは時期が異なり、より新しいものである可能性が考えられる。

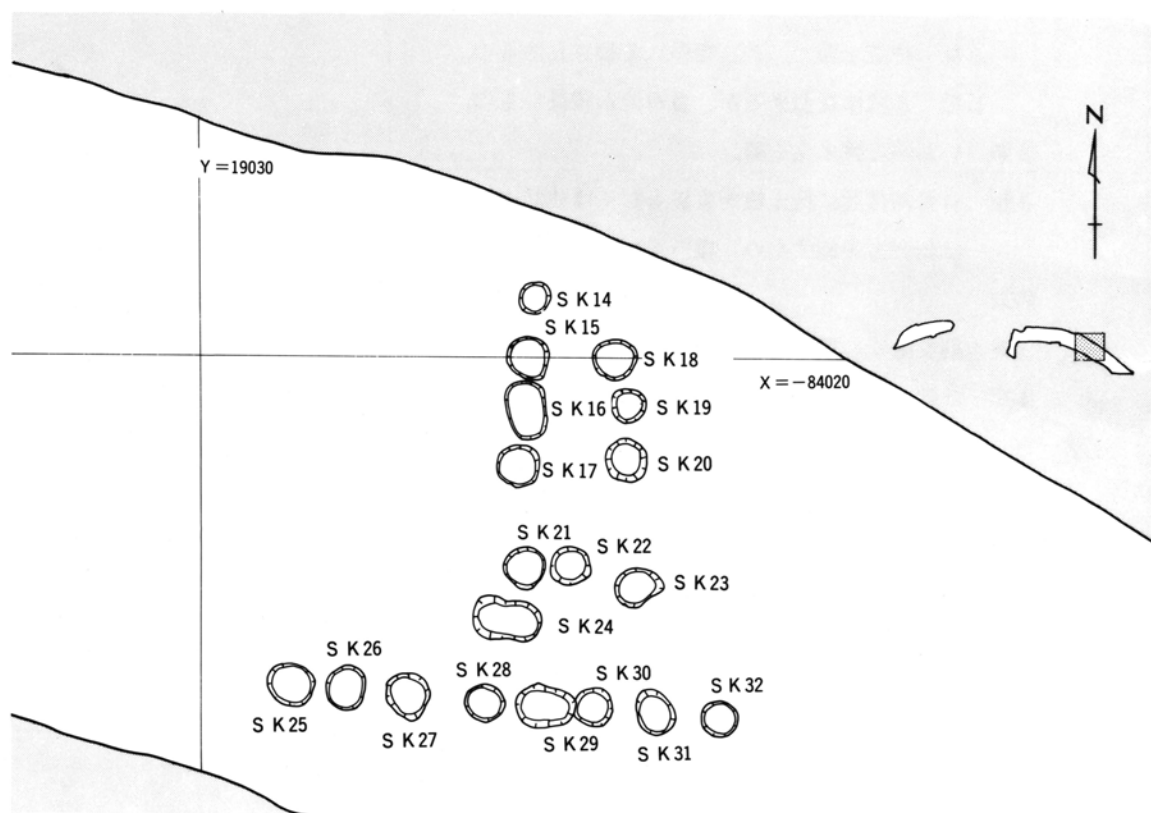


図12 土坑列 (S = 1/200)

第3章 遺物

出土遺物には、土器・陶器類、石器、金属製品などがみられるが、量的には土器・陶器類が圧倒的に多い。以下、これらについて土器・陶器類から順に具体的な説明を加えるが、各資料の法量などは巻末の一覧表に委ねる。また、出土地点についてもS B01を除いて、遺構に伴う資料が乏しく、記述が煩雑になるため、巻末の一覧表に記載するにとどめる。

(1) 土器・陶器類

①縄文時代の土器

縄文土器の分類 今回の調査で最も多く出土しているが、遺構に伴うものはS B01 資料を除くと、それぞれ1点もしくは数点に留まる。しかも、多くは包含層中、もしくは後世の遺構埋土中からの出土である。ここでは主に従来からの知見に従い、時間的なまとまりを「類」とし、さらに系統差などに注目した細分を「種」と区分して記述する。

以下、記述を進めて行く上での混乱を避けるため、まず縄文土器全ての分類を行った後、各「類」毎に説明を加えることとする。

早期

早期に属する資料は、3類4種に区分できる。

1類

A種 押型土器で、神宮寺系に分類されるもの。

B種 A種に類似するが、各单位が細長いもの。

2類 いわゆる撚糸文土器。

3類 口縁部付近に粘土紐を直線もしくは波状に貼付し、その上に貝殻による条線文または刺突文を施すもの。塩屋式に分類される。

前期

終末期を除く前期に属する資料は2類に区分できる。

4類 3類に類似するが、粘土紐上に施された条線文が器面にまで及ぶもの。

上の山Z式に分類される。

5類 大麦田式に類似するもの。

前期終末から中期初頭

S B01資料を代表例とする一群。今回最も量的なまとまりを持つ。1類3種に区分できる。

6類

A種 地文に縄文を施し、その上に細い粘土紐を多数貼付するもの。

B種 器壁は薄く、縄文を地文とし、外側に細い突帯を貼付するもの。

C種 半裁竹管による集合沈線文に代表されるもの。

D種 細線文に特徴的な一群。

中期

初頭を除く中期に層する資料は4類に区分できる。

7類 半裁竹管による平行線や、爪形の隆帯が特徴的な一群。大畑C1式に分類される。

8類 やはり半裁竹管を施文具の主体として利用している一群で、縦方向の半隆起線文を並べるものが主体とする。北屋敷式に分類される。

9類 船元式に類似する要素を持つものを集めた。

10類 太く浅い沈線文や、太い粘土紐を貼付するもの。

後期

後期に属する資料は1類に区分できる。

11類 磨消縄文を施したもの。

晩期

晩期に属する資料は1類に区分できる。

12類 条痕文系土器。

そのほか

類別が困難な一群。

1類A種（1～16）

いわゆるネガティブな楕円文を特徴とする一群。ただし、12は山形文の可能性を含む。 **早期の土器**
いずれも文様の彫りは浅く、雑然と施文されたものが多い。各単位の形状はまちまちである。器壁は厚く、胎土はほとんどが砂粒を多量に含むもので占められている。1は、口縁部片。端部は平坦である。2～15までは、体部片で、2が口縁部付近、15は底部付近か。いずれも全面にネガティブな楕円文が施されているが、2は、中央部分に幅1cm程度の無文帯を持つ。16は底部である。

1類B種（17～19）

3点のみ得られた。長楕円形の押型文を縦に並べる。胎土、焼成ともに1類A種に類似する。

2類（20）

1点のみ得られた。体部の小片で、外面に残る撚糸の間隔は疎である。器壁は12mmとやや厚く、胎土には繊維を含む。

3類（21～27）

器壁は薄く、胎土は緻密である。口縁は平縁を基本とするが、21・22のように波状を呈するものも含まれる。これらは口縁部付近の外面に集中して粘土紐で突帯を形成するのが特徴で、その上面に斜方向または縦方向の沈線を施している。突帯は横方向に直線または波状に貼付されることを基本とするが、22のように縦方向に貼付するものや、21のような不規則なものも存在する。また、やや特異な例として、23のように突帯下方に波状文を施

したものもある。

前期の土器 4 類 (28~33)

形状・胎土・焼成ともに 3 類によく類似するが、突帯上に施された沈線が、器壁にまで及ぶ一群。28・29は口縁部片。28はやや外反する。口端にはいずれも刻目文が施されている。原体は28がヘラ、29は貝殻である。

5 類 (34)

1 点のみ得られた。器壁は厚く、胎土には砂粒がめだつ。外面では、上面に四角い押圧を横に並べた幅の広い突帯を貼付し、空白部分に平行沈線文を縦方向に並列させている。

6 類 (35~76)

S B 01 (35~64)

前期終末から中期初頭 今回の調査中最もまとまりのみられる資料で、おおむね 6 類で占められている。このうち 50~63 までが土坑 1、64 が炉 1 号からの出土である。

の土器 35~49 は S B 01 埋土中の資料。35~41 は A 種。器壁はやや厚く、胎土には砂粒を含む。35~38 までは地文に縄文を施している。35 は大きく外反する。外面には地文上に、粘土紐を貼付することによる「ハシゴ」状の文様帯を施している。36 はその小片か。37・38 は棒状の粘土紐を貼付。37 は部分的に二枚貝の背面を押圧している。39・40 は幅の狭い隆帯を平行に並べた帯状の文様が特徴的な類。隆帯上には刻みがみられる。39 は隆帯群の空白部分をえぐりとしている。41 は「L 字」状に屈曲する形状を有する。屈曲部分の上面には、幅の狭い隆帯を平行に並べている。隆帯は半裁竹管により結節状を呈する。外面には何らかの剥落痕が認められる。

42~44 は B 種。器壁は薄く、胎土は密である。いずれも縄文を地文とし、細い粘土紐を貼付している。粘土紐上の刻みは、43 を除き、いわゆる「M 字」状の半裁竹管を使用。43 は時期的にやや遡る可能性を持つ。

45・46 は C 種。器壁はやや厚く、胎土は良好。外面に集合沈線文を持つ。

47・48 は D 種。口縁部の破片で、いずれも口端で短く屈曲する。外面には、細線文を施す。

49 は外面に羽状縄文を施す。やや遡るか。

50~63 までが S B 01 土坑 1 の出土。50 は A 種。底部片で、外面には縄文を地文とし、粘土紐を貼付する。51~55 までの B 種。51 は底部片。底部と体部の境界部分を所々削り取り、底面からみた形状が「ハナビラ」状を呈している。わずかに残存する体部外面には、縄文を施されている。52 は 42・44 と類似する。53・54 は、内面に粘土を貼付したことで幅の広い突帯を巡らしたあと、ここに縄文を施し、その両側部分を「M 字」状の半裁竹管により刻んでいる。外面もやはり縄文が施されるが、53 はさらに細い突帯を横方向に貼付し、内面と同様の刻みを施している。55 は 53 と類似するが、外面に貼付された突帯が円形を呈する。内面に施された低く幅の広い突帯は無文である。

56~58 までは、C 種。胎土・焼成が細部まで類似し、同一個体である可能性が高い。56 は口縁部分で、緩やかに内彎する。外面には、把手がつく。また、外面には、半裁竹管に

よる集合沈線文を施し、三角形を基本とした形状を半裁竹管による平行線で区画し、この部分を無文としている。57・58も56と詳細は細部まで同一。

59はD種。外面に細線文を施している。

60は底部片。61～63は外面に縄文を施している。なお、63は竹管による平行線を組み合わせた文様が施されている。

64は、炉1号に埋設された土器。体部の形状は、底部より直線的に伸びる。なお、図版6に記した矢印部分の破片は、土坑1から出土している。

その他(65～76)

65～76までは、SB01以外から得られた6類。いずれも胎土・焼成はSB01資料と類似する。65～67はA種。65は35によく類似する。ただし胎土・焼成の状況から同一個体とは考えられない。66は39に類似するが、削り取られた文様の空白部分は、三角形である。67も41と類似する。68～72はB種。68は口縁部を欠くが、55と類似する。69～71は53・54に類似する。73～76はC種。73・74は56～58・64と類似する。75は底部片で、集合沈線を縦方向に設定している。76はヘラによる平行線中にやはりヘラによる縦方向の刻みを間隔を疎にして並べている。

7類(77～86)

中期の土器

器壁は厚く、胎土には砂粒を含む。口縁部は得られた資料では平縁である。半裁竹管による直線文と、連続爪形文が特徴的なもの。

77は口縁部を30パーセント残存し、頸部で大きく開くキャリパー型。形状は口縁部付近で大きく屈曲し、文様体を形成して、口端に至る。口端はやや肥大し、平坦である。屈曲部分には突帯を貼付。口縁部は平縁で、突起を有する。突起の数は残存状況の関係から厳密にはできないが、2ヶ所として図示した。口縁部付近の文様体は、半裁竹管による隆線を縦方向に並べたもので、口端の突起から垂下する「ヒレ」状の装飾により区画される。頸部下方には、若干の無文部分がみられる以外は、縄文を地文とした部分が続き、さらに、竹管による直線文を縦方向に施した文様が刻まれている。なお、屈曲部分のやや下方には、ススが付着している。78～80は口縁部の破片。いずれも、口端で肥厚。81～83・85は口縁部下方に巡らされた突帯部分の破片で、上面には81・83では縄文が、82では半裁竹管による連続爪形文が施されている。84は体部片。縦方向に突帯を貼付し、これに平行する縦方向の直線文と刺突文が施される。原体は、半裁竹管となる。

8類(87～107)

器壁は薄く、胎土は密である。口縁は平縁を基本とするが、90のように波状を呈するものも含まれる。いずれも口縁部付近では無文となり、端部で面を持つものが多い。87～91・93～95は半裁竹管による隆帯を縦に並べる。92はヘラによる連続刺突文を口縁部の無文帯直下に施している。96～98は粘土紐貼付による区画をもつもの。97はヘラによる連続刺突文を施している。99・100・102はヘラによる連続刺突文、103・104は、半裁竹管による連続爪型文を横方向に施している。105～107までは、口縁部の形状からこれに含めた。いず

れも口端部分には、縁帯状の無文帯がみられる。なお、105・106はこの部分の直下に縄文を施している。

9類 (108～113)

器壁は薄く、胎土は概ね密である。108は口縁部の小片。端部はやや肥厚し、丸く収める。内面には縄文を施す。109は残存部分の中央に横方向の細い隆線を施している。110は外面には深浅に押捺された縄文を施す。111・112は縄文を地文とし、半裁竹管による直線文を施す。113は、111・112の地文部分の小片か。

10類 (114～123)

器面に、ヘラによる太く浅い沈線文や、太い粘土紐を貼付し、立体的な印象を与える一群。123を除き器壁は厚く、胎土には砂粒を含む。114・115・118・119は前者に属する類で、114は半裁竹管による縦方向の直線文。119は縄文を付加している。117は半裁竹管による隆帯で形成する区画文に、斜め方向の半裁竹管による直線文を充填したもの。116は、117の区画文中に該当する小片。ただし、116と同一個体であるかは不明。120は太い粘土紐2本を撚り合わせて浮文状に貼付し、その上から棒状工具の先端部分による刺突文を施したもの。121は120の刺突文部分に該当する小片。ただし、121と同一個体であるかは不明。122は土器の装飾部片か。表面のほとんどが欠落し、詳細は明らかではないが、ヘラによる直線文を施している。123は口縁部片。器壁は薄い。端部は縁帯を形成し、粘土紐を斜めに貼付している。

後期の土器 11類 (124)

1点のみ得られた。124は口縁部片。平縁の形状をとり、端部は平坦である。外面には、磨消し縄文を施す。

晩期の土器 12類 (125～128)

125～128までは条痕文系土器。器壁は厚く胎土には砂粒を多く含む。いずれも体部の小片である。

そのほかの そのほか (129～153)

縄文土器

分類不能なものを集めた。129～132までは、土器の底部。129は尖底土器の底部片。残存部分は無文である。130は底面からみた形状が四角形ないし五角形を呈する特徴的な土器で、6類の底部と考えられる。131は平底の底部で、外面に条痕文を残す。132は底部と体部の接合部分がやや外側に張り出す形状。133～142までは、羽状もしくは斜め縄文の施した一群。前期か。133は口縁部片で、口端付近で屈曲し、縁帯を形成する。143は口縁部片。口縁部の形状は、内彎する。端部は平坦となる。外面は縄文は地文とし、その上から細い粘土紐が貼付されている。144も口縁部片。口縁部付近の内面には粘土紐を貼付される。外面と、内面の粘土紐が貼付された部分には縄文が施されている。145は体部片。竹管による縦方向の直線文を施す。146も体部片。外面にはヘラによる太い沈線を2本施す。147は口縁部片で、口端付近でわずかに屈曲し、縁帯を形成する。148～150までは、体部片。外面には条線文を施す。3類または4類か。151～153も胴部片。151・152は竹管による文様に

特徴的な類。153はヘラを施文原体としている。

②弥生時代以後の土器・陶器

B期に伴う、土器・陶器類をここで報告する。時期的には中世に属するものが最も多い。

弥生時代（154～166）

弥生時代の資料は前章で報告した谷地形埋土中からまとまって出土している。

弥生時代の

154～164までが弥生時代中期に属するもので、154～161は広口壺。いずれも黒色を帯びた色調を呈する。外面には「ササラ」もしくは「ホウキ」状のクシにより、直線文・列点文が刻まれる。162は大鉢。下胴部の破片で、外面の最大径付近には、ススが付着する。163は台付甕台部上方の破片で、体部との接合部分が短い柱状を呈する。164は甕。外面には、太く浅い条痕文を施す。

土器

165・166は弥生時代後期に属する。いずれも甕。165は体部外面にハケメ調整の痕跡をとどめる。口縁部は長く外反する形状で、口端にはクシによる刻目文を施す。166は体部上方の小片で、クシによる整った波状文を施す。

古墳時代（167～171）

167～171までは、おおむね古墳時代に属する。167・168は土師器甕。167は底部を欠くが、ほぼ全形を知り得る資料。長胴形を呈する「長甕」となる。全体に風化が著しいが、口縁部内面にハケメ調整を施すほかは、全面にラフなヨコナデ調整痕をとどめる。168は口縁部の小片。外面に太く、粗いハケメ調整を施す。169～171は須恵器。169はフラスコ型瓶の頸部片。外面の中央には、クシによる直線文が施されている。170は蓋。内面にかえりがつく形状。171は甕。口縁部付近の小片で、頸部外面にクシによる波状文を施す。口端は縁帯を形成する。

古墳時代の

土器

平安時代～安土・桃山時代（172～208）

172～208までが平安時代～安土・桃山時代までのもの。172～198までは、灰釉系陶器。^{※1} 172は、碗の底部片か。高台はややくずれる三日月状を呈する。明瞭ではないため図示していないが、内面に施釉の痕跡が観察できる。外底部には、回転ヘラケズリ調整が認められる。前半期。173～198までは後半期。これらのうち、183は古相を示す。173～192までは碗。184を除き、「均質手」と呼称される一群。いずれも緻密な胎土を使用し、器壁は概ね薄い。底部には靱殻の圧痕をとどめる。形態的には概ね明和1号窯式～大洞東1号窯式におかれる^{※2}。184はいわゆる「荒肌手」と呼称される一群。1点のみ図示した。胎土には砂粒が目立ち、器壁は厚い。193～198までは「均質手」の小皿。いずれも偏平な形状を呈する。この他、図示していないが、鉢の口縁部片が1点ある。

平安時代以

後の土器

199～206まで施釉陶器。199・200は天目茶碗。いずれも高台周辺には鉄化粧を施す。底部の形状は199が輪高台、200が内反り高台である。ともに16世紀。202は尊式花瓶。底部の小片で、内外面に鉄釉を施す。203は小壺。内外面に灰釉を施している。204は四耳壺または三耳壺の肩部の小片で、外面に灰釉を施す。15世紀。205・206は播鉢。205は口縁部片で、206は底部片である。後者の内面には使用によると考えられる摩滅がみとめられる。205は

16世紀、206は15世紀。207・208は土師器鍋もしくは釜。207は口縁部直下に羽部を有する、羽釜。口縁部の直径は、体部の最大径よりも小さい。外面では羽部より下方にはハケメ調整の痕が残る。

図13は近世陶器。いずれも遺構に伴うものではない。17世紀を中心とする瀬戸・美濃産。

注

注1 本書においては「灰釉陶器」と「山茶碗」とを「灰釉系陶器」という名称で同一概念として考え、前者を前半期、後者を後半期と呼称する（池本 1990 a・1990 b）。

注2 若尾正成氏の御教示による。

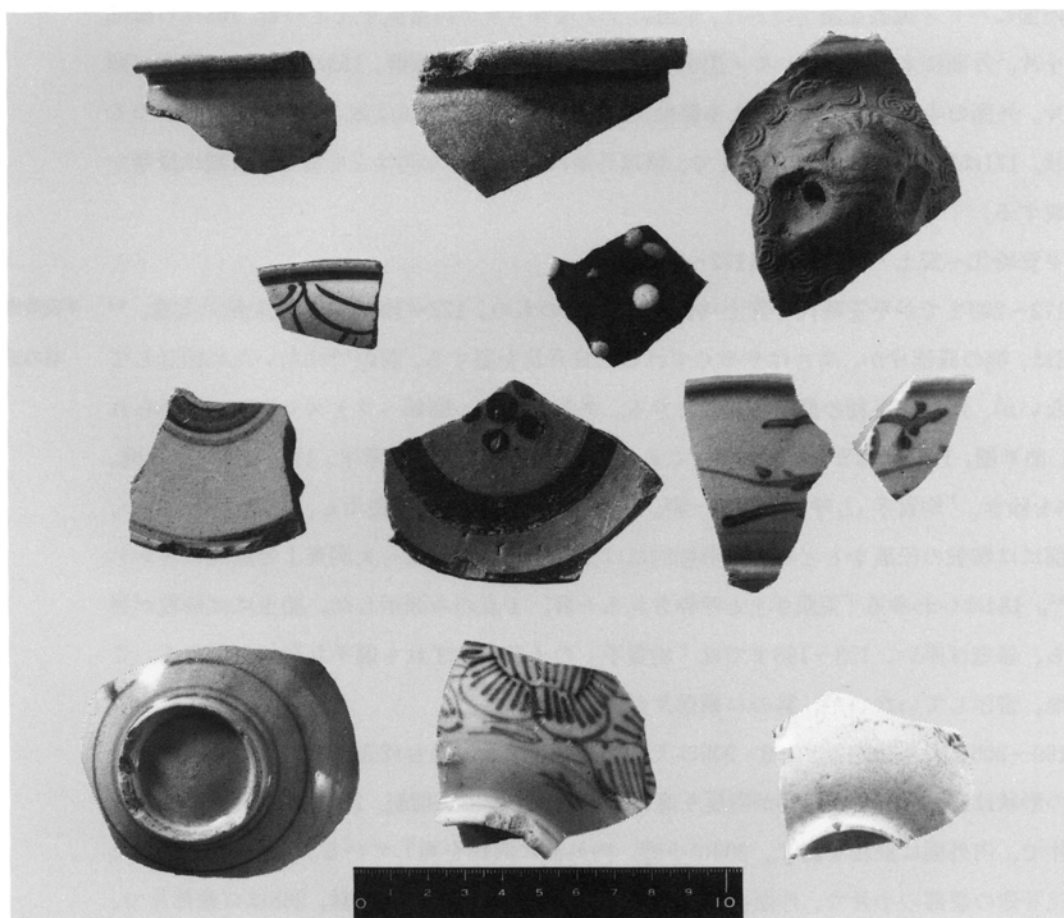


図13 近世陶器

(2) 石器

石器は量的に乏しい。器種としては打製石斧、磨製石斧、石錘、磨石、敲石、スクレイパー、石鏃、石皿の他、ビエスエスキーユや、使用痕のある剥片などがある。これらの年代は、出土している土器の時期幅内に収まるわけであるが、土器量の時期別差を考慮すると、大部分が縄文時代中期以前に属する可能性が大きい。

なお、これらの石質は巻末の一覧表に報告するが、全体的には使用目的に応じ、石材選択がなされていると考えられる。また、S B01埋土中からは、多量の黒曜石の剥片が出土している。これらはいずれも小片で、湾曲した形状のものや、チップ状のものが多く、石器製作の最終段階に生じたものと推定でき、S B01の埋没過程の窪地に投棄されたものと考えられる。

磨製石斧 (209)

2点出土。209は乳棒状を呈し、先端部を欠く。全体を敲打によって整え、その後刃部を研ぎ出している。刃部には使用痕が明瞭である。なお、このほかに刃部付近の小片が1点ある。

打製石斧 (210～219)

15点出土。今回得られた石器の中で最も量が多い。小振りなものが多く、形状は、短冊型と撥形の二者がみられる。側面はほとんどが直線状を呈するが、212・213のように弧状を呈するものも存在する。多くは使用による摩耗痕が著しく、ほとんどは下端にこれが確認できるが、213は両端で観察できる。なお、石質は安山岩が主体である。

石錘 (220)

明瞭なものは1点のみ。偏平な河原石の長径部分上下を打ち欠いて製作している。各打ち欠きの幅は、上部が16mm、下部が18mmで、間の長さは、最短で56mmとなる。

磨石 (221～224)

7点出土。磨石の多くは、素材となった礫に、あまり手を加えずして成形される。従って、法量や形状、摩耗の状況などは、まちまちなものとなっている。石質は、花崗岩が主体である。

スクレイパー (225)

明瞭なものは1点のみ。縦長剥片を利用したもので、長方形を呈する。長片の一部に刃部を形成している。

石鏃 (226～230)

5点出土。いずれも基部を持たないもので、底辺を大きくえぐるものと、わずかにこれをえぐるものがある。数量が乏しく明らかではないが、石質は黒曜石が主体を占めるようである。

石皿 (236)

明瞭なものは、S K10から出土した1点のみである。板状の花崗岩を用い、周辺部分に

一部調整を加えることにより、「球根形」を呈する形状を作り上げている。なお、摩耗痕は両面に認められる。

(3) 金属器

金属製品は、非常に少ない。

銭貨（231～235）

結束された S K02の上面から5枚が錆び付いた状態で出土した。順番は、231から順に、231の文字面と232の文字面、同無文字面と233の文字面、同無文字面と234の文字面、同無文字面と235の文字面である。紐などで束ねられたものと判断できるが、その痕跡はとどめてはいない。銭種は、231と233が元祐通宝（北宋 986年初鑄）、232が咸平元宝（北宋 998年初鑄）、234が開元通宝（唐 621年初鑄）、235が宋元通宝（北宋 960年初鑄）である。

弾丸

B区の1層中より出土した。やや大型で先端部は、着弾時の衝撃によりつぶれている。残存部の法量は、最大径が13mm、全長が43mm、重量が226gとなる。



図14 弾丸

第4章 ま と め

今回の調査は対象面積4500㎡とやや広い面積に及び、三河山間部での遺跡のあり方を考える上で貴重な資料を提供したものといえる。今回検出された遺構は、その性格の判断できないものが大部分であるが、時期的には縄文時代から近世までと長期にわたるもので、山間部における限定された平坦部を繰り返し利用していたことが考えられる。また、遺物については総数が整理箱に50箱程度と多量とはいいいがたいが、遺跡の所在地が三河と美濃の境界部分に所在していることから、その内容は多彩なものとなっており注目できる。

以下、今回の調査成果をまとめる。

①縄文時代

明確な遺構は乏しいが、竪穴住居（S B01）は注目される。全体的な様子は、図4に提示した大砂遺跡（天野他 1981）や、久保田遺跡・万場垣内遺跡（吉田他 1968）などの縄文時代の竪穴住居やや時期が下がるものと同様である。なお、床面上に設定された炉については、それぞれの周辺部分にみられる小土坑が石の抜き取り痕である可能性を考え、これに相当すると推定している。ところが、最近岐阜県中津川市や恵那市で検出されはじめているこの時代の住居に伴う炉は石囲い炉ではなく、地床炉もしくは埋甕炉が多いとする調査所見があり^{※1}、このため、ここではこれについてこれを断言することは差し控えたい。

次に遺物についてのべる。

まず1類であるが、上万場遺跡から検出されている1類土器はA種とした神宮寺系の範疇に含まれるものが多く、時期的にほぼまとまりをもっていると考えられることができる。ただし、2類とした燃糸文土器は、高山寺系と呼称される菱形押型文を伴うもので、上万場遺跡においても、これが存在していた可能性は大きい。また、1類B種とした、細長い押型文は、岐阜県九合洞穴（澄田 1957）に類例をみることができる。

4類とした一群は早期末に位置づけられている塩屋式である。この土器は、標式遺跡である知多郡南知多町に所在する塩屋遺跡においては、口縁部に集約される隆線上に貝殻による隆線を刻むものと、やはり貝殻による擬似縄文を施すものの二者が存在するようであるが、上万場遺跡のそれは前者のみに限定されている。この点について磯部幸男氏は、標式遺跡である塩屋遺跡の資料を分析する中で、この資料を層位学的見地から上層・中層・下層とに区分し、このうちの上層を塩屋式に該当させ、これをさらにA類・B類と細分している（磯部 1984）。このA・B類の差は、隆線上を前者が隆線で刻む（A類）のに対し、後者は擬似縄文を施す（B類）といった文様構成上の理由の他に、前者のみわずかに中層土器を伴って出土しているという層位学的な知見も加味したもので、時間差として認識できるものと指摘している。上万場遺跡における塩屋式のあり方は、塩屋遺跡でいう上層A類単純となり、磯部氏の分類とよく整合するようである。

土器 6 類 次に 6 類とした資料であるが、この時期に含まれると判断されるものは、今回 3 種に区分して報告した。具体的には、西日本系の範疇である B 種と、東日本系の A・C 種である。これらは、S B01 埋土中においては混在し、さらに S B01 土坑 1 で図 15 に表現したように比較的安定した量を得ている。この土坑は、第 2 章にも記したように、S B01 の南側床面上に設定されているもので、その用途については判然としないものの、その位置から比較的短時間に埋没した可能性が極めて高いと言わねばならないものである。ところで、これらを現在の縄文土器編年にあてはめると、A 種と C 種は時間差として認識されているようである。これは、前者が細かい粘土紐を器面に貼付し文様を構成しているのに対し、後者ではこれが地文化し、半割された細い竹管状の器具によるカマボコ状の隆起帯を連続して作ることで、前者の粘土紐と同様な視覚的効果を生じさせていることから、型式学的な前後関係を認めうるものが根拠とされている(今村 1985)。つまり、前者が前期末の十三菩提系に、後者が中期初頭の五領ヶ台系にそれぞれ類似する特色を持っている。後者に細線文に代表される一群が含まれることもこの点を補足する事実となろう。ただし、両者は非常に類似性が強い。また B 種は、西日本系の大歳山式に類似し従来の知見によれば A 種と併行関係を保つとされている。ただし、上万場遺跡では C 種と時間的に併行関係をもつ西日本系の鷹島式(巽 1969)とされる一群が、S B01 はおろか包含層中にすら含まれていないという点についても検討を加える必要がある。従って、S B01 の一括資料を持つ 6 類の位置を評価するには、今後の資料増加が不可欠であると言わねばならない^{※2}。

土器 8 類 8 類とした北屋敷式に含まれる一群は、現在整理中である本県北設楽郡東栄町上の平遺跡でもややまとまって出土している。ただしこの資料には北屋敷式の特色の一つである角状突起が多く含まれているのに対して、上万場遺跡ではこれが欠落している。通常肉厚に整形されるこの部分が存在しないという事実は、北屋敷を細分させる方向性を示しているのかもしれない。この時期の遺物がまとまって出土している知多郡南知多町清水ノ上貝塚では上万場遺跡 8 類を 3 群 2 類 C と分類しており、今回の上万場遺跡例出土資料をもって、清水ノ上貝塚分類の妥当性を確認する事ができる。また、9 類としたものの一部は、従来

北屋敷式にともなうものとして考えられているものであるが、上万場遺跡のあり方は、従来の知見を補足するものと言えよう。

② 弥生時代

上万場遺跡では弥生時代の明確な遺構は乏しいが、谷地形埋土から出土しているややまとまった土器は、弥生時代中期に属する。それらは「獅子懸式」とか「古井式」などと呼称され(久永 1955)、三河平野部を空間的分布圏とするものであ

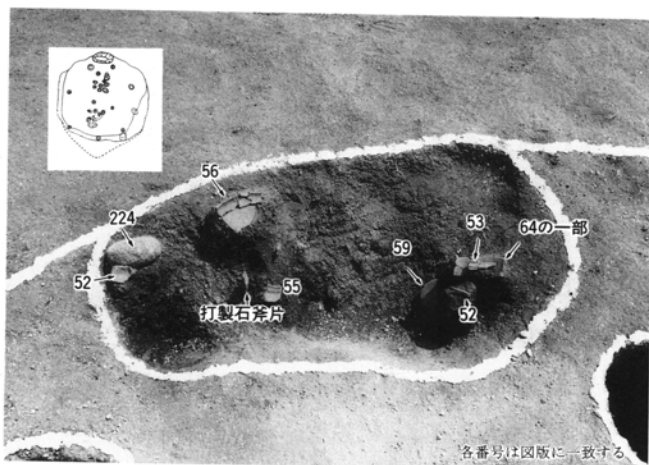


図 15 S B01 土坑 1 遺物出土状況

る。この様式の土器群は、肩部に張りをもつ「しもぶくれ」の形状にササラ状のクシを施文 弥生時代の
具とした広口壺、台部との接合部分が柱状の形態をとる台付甕などに代表される独特の一 土器
群で、特に壺については黒色に焼成されること（池本 1990c）を原則としている。

ところでこの段階の土器は、三河外部への搬出が基本的に乏しく、閉鎖された性格を考
えることができる。そして、若干知られている三河外部の例では壺にみられる黒色焼成の
原則を守ってはならず、これらの土器の基本的焼成方法は正しく外部に伝播してはいない
ことが考えられるのである（尾張地方を除く）。従って上万場遺跡の例が、壺について黒色
焼成の原則を守っていること、かつそれが三河平野部独特の台付甕を伴っていることは、
重要な意味を持っているといえる。また、上万場遺跡では、西尾市岡島遺跡の報告書（池
本 1990c）で大鉢Bと分類された器種も出土している。この器種は装飾性の高い器形で
あるにも関わらず、原則として煮沸の痕跡をとどめるという、やや特異なものである。そ
して、その独特の形状と、煮沸具であるにもかかわらず豊富な文様で飾る姿に、通常とは
やや異った使用のあり方を求めることができるのであれば、この器種の存在に注目するこ
とで、上万場遺跡がよりオリジナルに近い三河平野部の組成を持っていることが考えられ
るのである。ところで、上万場遺跡の北東20km地点に所在する岐阜県恵那市大野吾遺跡（宮
腰 1982）でもこの種の土器は確認されている。器種は、広口壺である。総破片数は21点
を数えるが、このうちいくつかは、同一個体である可能性が考えられる。この資料は、図16

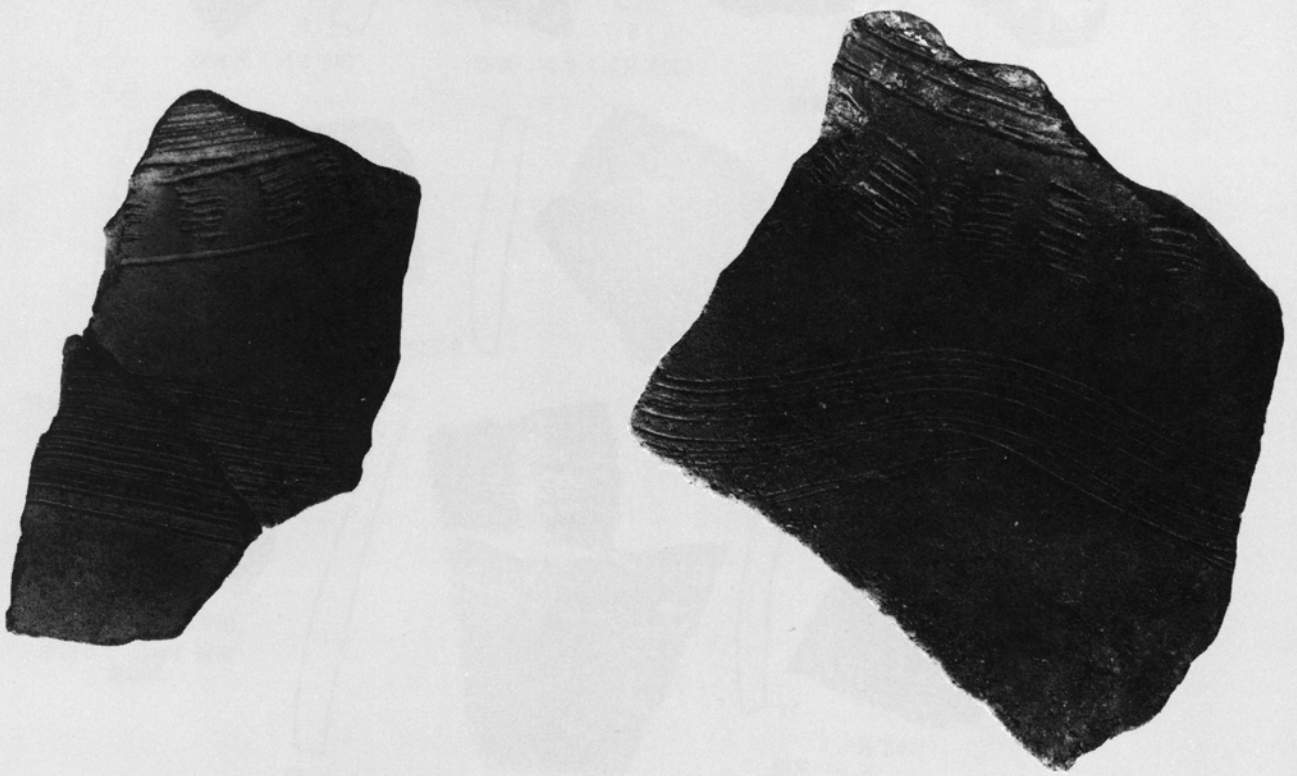


図16 古井式土器（左 上万場遺跡・右 岡島遺跡）

原寸

に示すように、黒色焼成の原則とはやや一致しない点も含みもっていて、注目に値する。これらの資料だけで判断することは若干資料不足のそしりをまぬかれないかもしれないが、いわゆる「古井式」と呼称される土器概念が、上万場遺跡の周辺を北限とし、東濃地方までは及んでいないことが考えられるからである。

弥生後期の また、後期段階での中部高地系土器の存在は、伊那谷との関連を考えることができる。

土器 それらの一群は土岐川流域においても尾張・三河地方に代表的な土器群に混じって、幾例か知られており²³、むしろ東濃地方の西部においては、一般的な事例であるといえる。そし

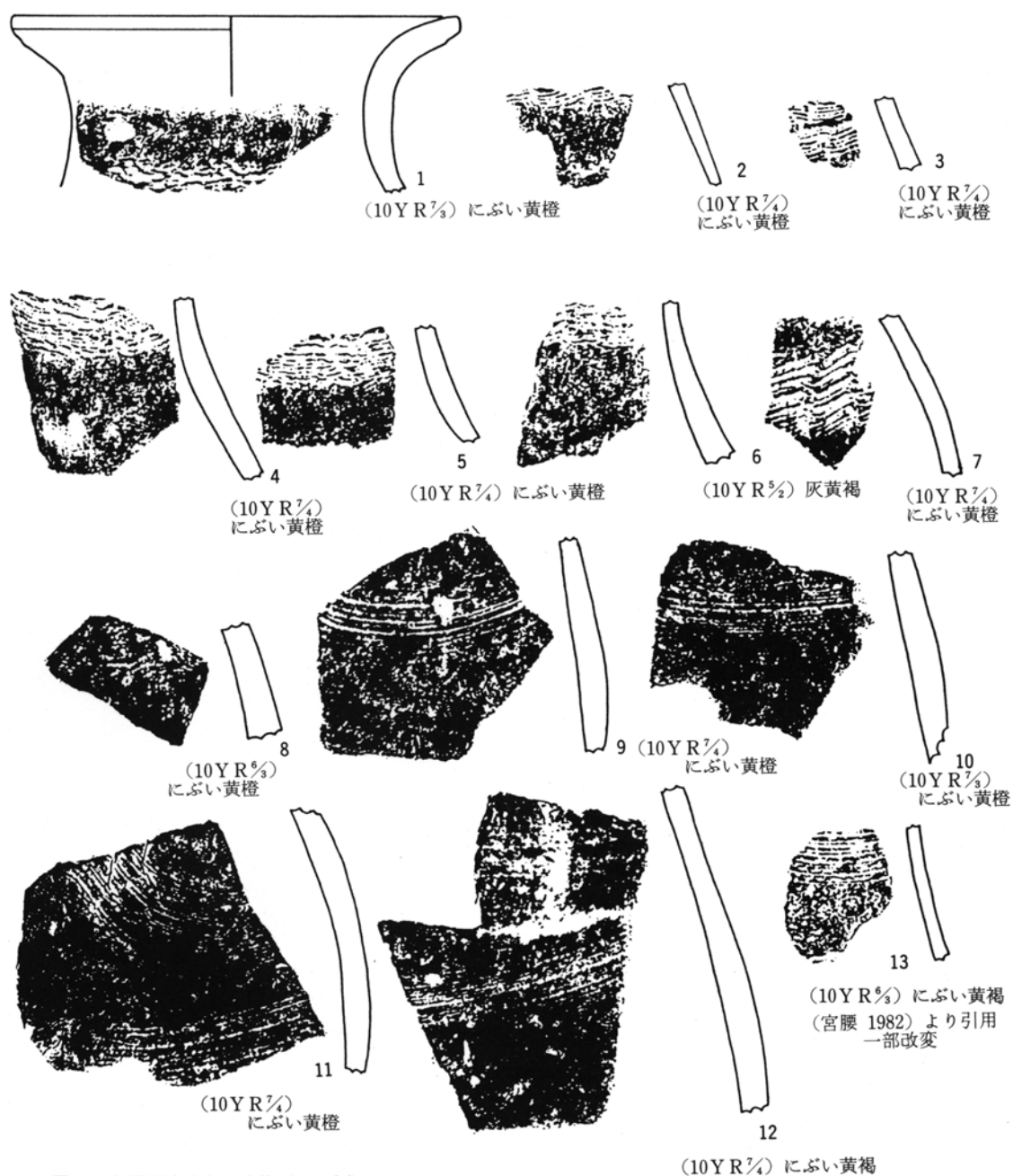


図17 大野吾遺跡出土遺物 (S=1/4)

て、今回出土した1点の資料からみても、上万場遺跡のあり方は、東濃地方の要素を受けているといえる。なお、三河地方での管見に触れた中部高地系土器の南限は、東加茂郡足助町の大境遺跡（天野他 1981）である。

③古墳時代以降

上万場遺跡ではこの時代に属する痕跡は明確に把握できない。ただ、古墳時代後期に属するS B02の存在は注目することができる。総面積4500㎡にもおよぶ調査範囲のなかで、1棟のみ検出に留まったあり方は、平野部におけるこの時代の遺跡の様相とは現象的に異なっている。これについてはB区で検出されている掘立柱建物の存在をも注意する必要があるが、各々の柱穴やその周辺部分から古墳時代に含められる遺物は全く発見されていないのである。従ってこのようなあり方からみて、従来から関東地方で事例が報告されている『離れ国分』（中山 1976）と呼称されるものに該当する可能性を指摘することができる。古墳時代後期における土地開発を考える場合に、今後上万場遺跡で確認されたこのような事例が増加すれば、山間部への人々の進出していくあり方を捉える上で有効な資料となり得るのかもしれない。

中世については、屋敷地を検出している。これらはいずれも小規模なもので、しかも尾張低地の検出例にみるような溝による方格地割りをともなったものではなく、柵による区画を持つものであることは注目に値する。これらの屋敷地は、時期決定に明確な根拠を欠くが、柱穴の埋土からみて、概ねS B06柱穴出土資料（174・197・201・202）と同様の時期、すなわち14・15世紀と考えることができるだろう。

付記

今回の調査で本遺跡から得られた土器のうち、12類と弥生土器については、胎土の重鋳物分析を前述した北設楽郡東栄町上の平遺跡の比較試料として実施している。結果などについては、平成3年度発行予定の同遺跡調査報告書に譲る。本報告書との対応関係については、巻末の付表の備考欄に提示したS（サンプル）番号を参照されたい。

注

注1 川野典夫氏の御教示による。

注2 ただし、S B01埋土には8類が1点認められるほか、最も安定していると考えられる土坑1ですら63のようなやや時期的に下がる可能性を持つものも含まれており厳密に言えば、資料の一括性そのものにも問題点を内在させている。

注3 林順一氏の御教示による。

参考・引用文献

- 天野暢保 1981 『麦入遺跡』 旭町教育委員会
 1982 a 『落合遺跡』 旭町教育委員会
 1982 b 『大砂遺跡』 旭町教育委員会
 1985 『大砂遺跡』 2 旭町教育委員会
- 天野暢保他1981 「大境遺跡」『埋蔵文化財確認調査』(2) 足助町教育委員会
- 池本正明 1990 a 「猿投窯の山茶碗」『マージナル』10 愛知考古学談話会
 1990 b 「奥三河の灰釉系陶器」『考古学フォーラム』 愛知考古学談話会
 1990 c 「岡島Ⅰ～Ⅳ期の設定」『岡島遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- 磯部幸男 1984 「塩屋遺跡出土の縄文土器」『知多古文化研究』Ⅰ 知多古文化研究会
- 伊藤稔他 1979 『ほ場整備事業関連遺跡範囲確認調査』 旭町教育委員会
- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 東京大学文学部考古学研究室
- 岩瀬彰利 1988 「東三河における縄文中期中葉の土器について」『三河考古』創刊号
- 大参義一他1970 『旭町誌』資料編 旭町教育委員会
 1971 『旭町誌』 旭町教育委員会
- 紅村 弘他1974 『桜洞・沖田』 萩原町教育委員会
 1977 『東海先史文化の諸段階』(資料編Ⅰ)
- 小島俊彰他1986 『真脇遺跡』 能都町教育委員会
- 後藤浩一 1989 「町田遺跡火山灰下層出土の縄文土器の編年的位置づけ」『町田遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木茂夫 1982 『墓ノ入古墓』 旭町教育委員会
- 澄田正一他1957 『九合洞穴遺跡』
- 巽 三郎他1969 「鷹島遺跡発掘調査報告書」『熊野路考古』5 南紀考古同好会
- 中山吉秀 1976 「離れ国分考」『古代』62 早稲田大学考古学会
- 久永春男 1955 「東海」『日本考古学講座』4 河出書房
- 久永春男他1965 「愛知県知多半島南端における縄文時代早期末～前期初頭の遺跡群」『古代学研究』41 古代学研究会
- 間壁忠彦他1971 『里木貝塚』 倉敷考古館
- 増子康眞 1980 「東海西部の縄文中期半型式編年試論—南森遺跡縄文土器の考察に代えて—」『岐阜県八百津町南森遺跡発掘報告』 八百津町教育委員会
 1985 「北白川下層Ⅱa・Ⅲ式並行の東海地方西部の土器」『古代人』45
- 増子康眞他1973 「縄文文化の遺構と遺物」『牧野小山遺跡』 岐阜県教育委員会
 1991 「矢作川流域の縄文文化研究Ⅰ—北屋敷式土器2遺跡の紹介—」『古代人』52 名古屋考古学会
- 宮腰健司 1982 「弥生土器～土師器」『阿木川ダム関係遺跡発掘調査報告書』 恵那市教育委員会
- 山下勝年他1976 『清水ノ上貝塚』 南知多町教育委員会
- 吉田富夫他1968 『矢作ダム水没地域埋蔵文化財調査報告』 愛知県教育委員会
- 渡辺 誠他1985 『阿曾田遺跡』 中津川市教育委員会

主要遺構計測一覧

堅立住居

名 称	規 模	調査区別遺構番号	方 位
S B 01	東西4.6×南北4.7	90 A、S B 01	
〃 02	東西4.2×南北3.5か?	90 C、S B 01	

掘立柱建物

名 称	規 模	調査別遺構番号	方 位
S B 03	1間2.6m×2間3.5m	90 B、S K 373、385、384、327、370、371	N-6'-E
〃 04	2間2.2m×3間4.0m	90 B、S K 341、334、298、296、292、294、332	N-80'-W
〃 05	2間2.7m×3間2.7m	90 B、S K 255、238、237、236、228、208	N-26'-E
〃 06 A	3間4.6m(3間4.0m)	90 B、S K 106、105、108、150 b、151 b、154	N-40'-E
〃 06 B	3間5.2m×(2間3.6m)	90 B、S K 107、110、111、109、150 a、151 a	N-39'-E
〃 07	2間3.5m×(3間3.0m)	90 B、S K 56、54、52、49、48、47、46、40、45、55	N-50'-E
〃 08	2間2.0m×3間3.2m	90 B S K 32、31、27、26、24、20、19	N-54'-E

棚

名 称	全 長	調査区別遺構番号	方 位
S A 01	13.4m	90 B、S K 472、455、459、466、464、451、366	N-21'-E
〃 02	6.9m	90 B、S K 394、398、400、402、432、457、460	N-69'-W
〃 03	14.2m	90 B、S K 301、303、338、343、347、412、411	N-89'-E
〃 04	1.7m	90 B S K、37、38、39	N-54'-W

土坑

名 称	長径	短径	深	調査区別遺構番号	備 考
S K 1	1.1m	0.75m	0.14m	A区 S K 01	
2	1.15m	0.95m	0.16m	S K 06	
3	0.85m	0.75m	0.1m	S K 03	
4	0.5m	0.4m	0.07m	S K 49	
5	0.6m	0.5m	0.11m	S K 05	土坑A
6	0.8m	0.5m	0.13m	S K 94	土坑A
7	0.25m	0.2m	0.08m	S K 87	
8	0.55m	0.35m	0.14m	S K 109	
9	0.3m	0.15m	0.27m	S K 125	
10	2.75m	2.25m	0.12m	S K 155	土坑B
11	0.6m	0.8m	0.1m	S K 08	
12	2.5m	1.8m	1.0m	S K 273	
13	3.8m	3.4m	0.13m	S K 212	土坑B
14	0.85m	0.55m	0.26m	S K 235	土坑列

S K 15	1.1m	1.0m	0.17m	A区 S K 237	土坑列
16	1.55m	1.0m	0.31m	S K 239	〃
17	1.1m	1.05m	0.14m	S K 240 a	〃
18	1.15m	1.0m	0.29m	S K 236	〃
19	0.95m	0.85m	0.12m	S K 238	〃
20	1.15m	1.1m	0.12m	S K 240 b	〃
21	1.1m	1.1m	0.15m	S K 253	〃
22	1.1m	1.0m	0.16m	S K 251	〃
23	1.3m	0.7m	0.12m	S K 247	〃
24	1.8m	1.0m	0.15m	S K 254	〃
25	1.25m	1.1m	0.18m	S K 300	〃
26	1.2m	1.0m	0.16m	S K 297	〃
27	0.85m	0.85m	0.04m	S K 267	〃
28	1.05m	0.95m	0.17m	S K 287	〃
29	0.65m	0.55m	0.04m	S K 265	〃
30	0.5m	0.5m	0.11m	S K 257	〃
31	1.25m	0.95m	0.14m	S K 256	〃
32	0.4m	0.3m	0.08m	S K 226	〃
33	0.5m	0.4m	0.03m	S K 266	
34	0.25m	0.25m	0.04m	S K 268	
35	2.6m	0.02m	0.03m	S K 278	
36	0.7m	0.6m	0.12m	B区 S K 354	
37	1.25m	1.1m	0.06m	S K 356	
38	1.25m	1.15m	0.22m	S K 351	
39	0.7m	0.45m	0.12m	S K 352	
40	1.2m	0.95m	0.18m	S K 337	
41	0.9m	0.3m	0.1m	S K 309	
42	1.35m	1.05m	0.24m	S K 306	
43	0.85m	0.75m	0.05m	S K 267	
44	1.65m	1.4m	0.33m	S K 266	
45	0.9m	0.7m	0.15m	S K 262	
46	0.55m	0.5m	0.11m	S K 207	
47	1.5m	1.25	0.47m	S K 257	
48	3.15m	2.55m	0.11m	S K 195	土坑B
49	0.95m	0.6m	0.09m	S K 281	
50	0.5m	0.3m	0.18m	S K 249	
51	0.4m	0.25m	0.09m	S K 226	
52	5.6m	0.25m	0.17m	S K 158	
53	1.6m	0.25m	0.06m	S K 159	
54	1.85m	1.55m	0.17m	S K 59	
55	0.75m	0.6m	0.09m	S K 03	
56	2.95m	0.5m	0.55m	C区 S K 15	
57	0.55m	0.35m	0.16m	S K 19	
58	0.4m	0.3m	0.1m	S K 06	
59	0.35m	0.3m	0.09m	S K 05	
60	0.55m	0.5m	0.11m	D区 S K 01	
61	14.1m	2.5m	0.35m	S D 12	土坑C

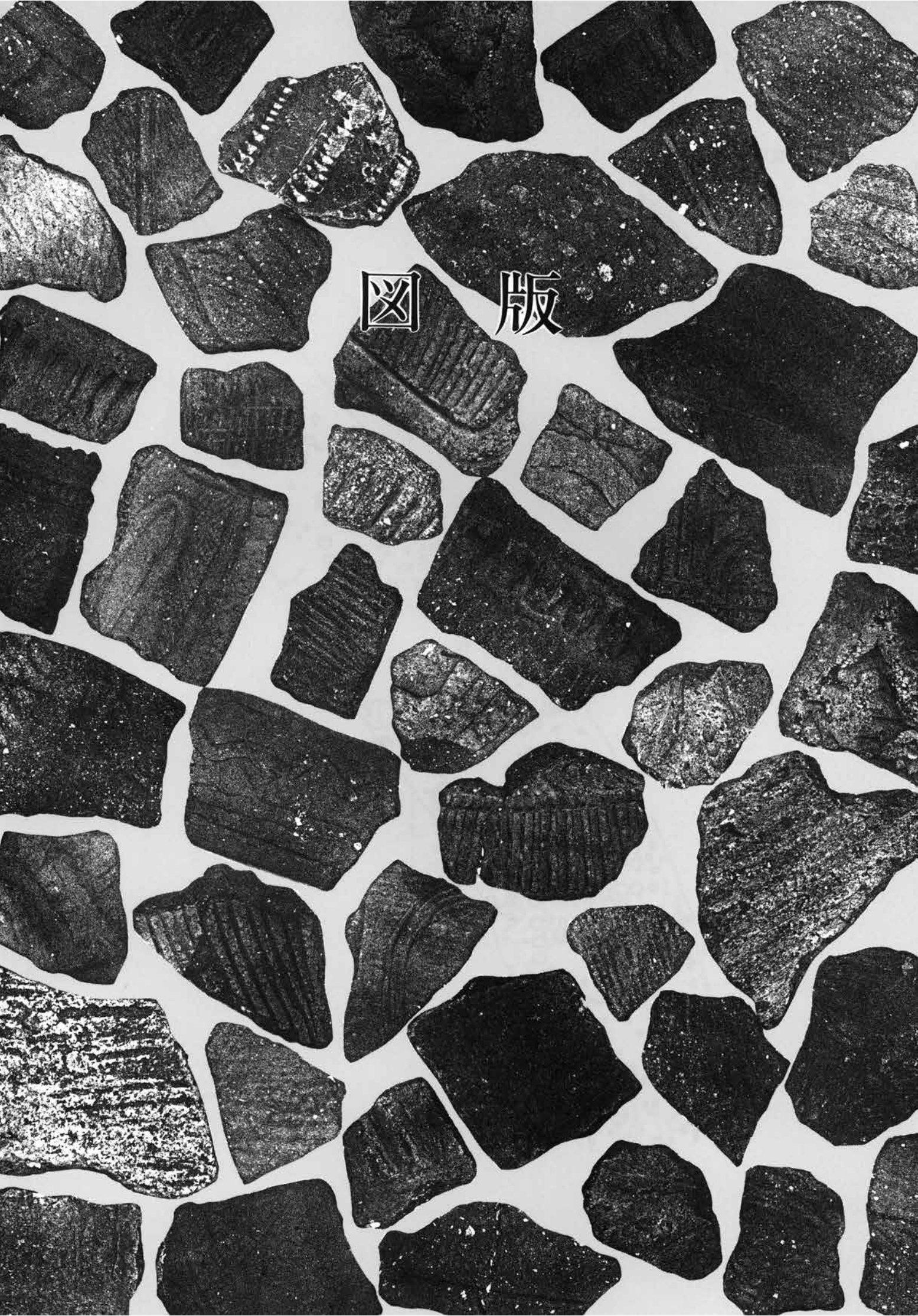
遺物計測一覧

№	分類	登録番号	出土位置	口径 底径 器高	色 調	備考	№	分類	登録番号	出土位置	口径 底径 器高	色 調	備考
1	1 類A種	E-168	A区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄褐		61		E-32	SB01 土坑1	— 8.0 —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
2	"	" 35	SK02	— — —	2.5Y ⅓ 淡黄		62	"	" 25	"	— — —	7.5YR ⅓ 橙	
3	"	" 36	SK02	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄		63	"	" 30	"	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄	
4	"	" 37	SK11	— — —	10YR ⅓ にぶい黄褐		64	6 類C種	E-1	SB01 土坑1号	— 11.0 —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
5	"	" 120	A区	— — —	2.5Y ⅓ 淡黄		65	6 類A種	" 208	B区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
6	"	" 179	"	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄		66	"	" 149	A区	— — —	5 YR ⅓ 橙	
7	"	" 169	"	— — —	10YR ⅓ 褐		67	"	" 133	"	— — —	7.5YR ⅓ 橙	
8	"	" 275	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		68	6 類B種	" 62	SK33	— — —	10YR ⅓ 明黄褐	
9	"	" 125	"	— — —	2.5Y ⅓ 淡黄		69	"	" 45	A区	— — —	2.5Y ⅓ 淡黄	
10	"	" 153	"	— — —	2.5Y ⅓ 淡黄		70	"	" 60	SK30	— — —	10YR ⅓ にぶい黄褐	
11	"	" 151	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄褐		71	"	" 298	A区	— — —	10YR ⅓ 明黄褐	
12	"	" 166	"	— — —	2.5Y ⅓ 淡黄		72	"	" 287	SK17	— — —	2.5Y ⅓ 黄	
13	"	" 274	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		73	6 類C種	" 61	SK44	— — —	7.5YR ⅓ 明褐	
14	"	" 177	A区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		74	"	" 123	A区	— — —	7.5YR ⅓ 橙	
15	"	" 38	SK11	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄		75	"	" 207	B区	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄	
16	"	" 34	SK03	— — —	10YR ⅓ にぶい黄褐		76	"	" 184	A区	— — —	7.5YR ⅓ 橙	
17	1 類B種	" 181	A区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄褐		77	7 類	" 71	SK40	18.7 — — —	7.5YR ⅓ 橙	
18	"	" 176	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄褐		78	"	" 199	B区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
19	"	" 171	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄褐		79	"	" 295	SK12	— — —	10YR ⅓ にぶい黄褐	
20	2 類	" 228	B区	— — —	10YR ⅓ 浅黄橙		80	"	" 75	SK40	— — —	5 Y ⅓ 灰オリーブ	
21	3 類	" 172	A区	— — —	7.5YR ⅓ 浅黄橙		81	"	" 202	B区	— — —	10YR ⅓ 明黄褐	
22	"	" 77	B区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		82	"	" 280	SK10	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄	
23	"	" 173	A区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		83	"	" 283	SK15	— — —	7.5Y ⅓ 橙	
24	"	" 279	SK10	— — —	10YR ⅓ 浅黄橙		84	"	" 269	D区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
25	"	" 190	B区	— — —	7.5YR ⅓ 浅黄橙		85	"	" 154	A区	— — —	10YR ⅓ 浅黄橙	
26	"	" 292	SK13	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		86	"	" 273	SK08	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
27	"	" 297	A区	— — —	5 YR ⅓ 淡橙		87	8 類	" 88	SK38	— — —	10YR ⅓ 浅黄橙	
28	4 類	" 165	"	— — —	10YR ⅓ 浅黄橙		88	"	" 6	SB01	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
29	"	" 194	B区	— — —	7.5Y ⅓ 橙		89	"	" 197	B区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
30	"	" 126	A区	— — —	10YR ⅓ 明黄褐		90	"	" 86	SK38	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
31	"	" 167	"	— — —	5 YR ⅓ 明赤褐		91	"	" 90	SK36	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
32	"	" 76	SK40	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		92	"	" 300	A区	— — —	2.5Y ⅓ 暗灰黄	
33	"	" 276	D区	— — —	2.5Y ⅓ 灰白		93	"	" 87	SK38	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
34	5 類	" 74	SK40	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄		94	"	" 84	"	— — —	2.5Y ⅓ 淡黄	
35	6 類A種	" 19	SB01	— — —	10YR ⅓ にぶい黄褐		95	"	" 152	A区	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄	
36	"	" 272	"	— — —	10YR ⅓ 明黄褐		96	"	" 192	B区	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄	
37	"	" 5	"	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄		97	"	" 185	A区	— — —	10YR ⅓ 浅黄	
38	"	" 13	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		98	"	" 79	B区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
39	"	" 10	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		99	"	" 67	SK49	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄	
40	"	" 8	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		100	"	" 191	B区	— — —	2.5Y ⅓ 暗灰黄	
41	"	" 11	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		101	"	" 277	SK10	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
42	6 類B種	" 16	"	— — —	10YR ⅓ 浅黄橙		102	"	" 68	SK49	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄	
43	"	" 3	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		103	"	" 64	SK32	— — —	2.5Y ⅓ 暗灰黄	
44	"	" 9	"	— — —	10YR ⅓ 灰黄褐		104	"	" 80	B区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
45	6 類C種	" 4	"	— — —	7.5YR ⅓ 橙		105	"	" 195	B区	— — —	10YR ⅓ 黄橙	
46	"	" 7	"	— — —	7.5YR ⅓ 橙		106	"	" 293	SK19	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄	
47	6 類D種	" 14	"	— — —	7.5YR ⅓ にぶい褐		107	"	" 203	B区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄褐	
48	"	" 15	"	— — —	7.5YR ⅓ にぶい橙		108	9 類	" 82	SK38	— — —	7.5YR ⅓ 橙	
49	"	" 17	"	— — —	5 YR ⅓ 橙		109	"	" 186	A区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄褐	
50	6 類A種	" 20	SB01 土坑1	— 12.5 —	10YR ⅓ にぶい黄橙		110	"	" 182	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
51	"	" 28	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		111	"	" 196	B区	— — —	2.5Y ⅓ オリーブ褐	
52	6 類B種	" 27	"	— — —	10YR ⅓ 浅黄橙		112	"	" 221	"	— — —	2.5Y ⅓ オリーブ褐	
53	"	" 29	"	— — —	2.5Y ⅓ 淡黄		113	"	" 201	"	— — —	2.5Y ⅓ オリーブ褐	
54	"	" 26	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		114	10 類	" 299	"	— — —	7.5YR ⅓ 明褐	
55	"	" 12	"	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙		115	"	" 200	"	— — —	7.5YR ⅓ 明褐	
56	6 類C種	" 31	"	— — —	10YR ⅓ 褐		116	"	" 281	SK10	— — —	10YR ⅓ 明黄褐	
57	"	" 23	"	— — —	7.5YR ⅓ 黄橙		117	"	" 178	A区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
58	"	" 22	"	— — —	7.5YR ⅓ 橙		118	"	" 93	B区	— — —	10YR ⅓ にぶい黄橙	
59	6 類D種	" 24	"	— — —	7.5YR ⅓ 橙		119	"	" 43	SK13	— — —	2.5Y ⅓ 黄褐	
60	"	" 21	"	— 8.0 —	10YR ⅓ にぶい黄褐		120	"	" 129	A区	— — —	2.5Y ⅓ 黄褐	

№	分類	登録番号	出土位置	口径 底径 器高	色 調	備考	№	分類	登録番号	出土位置	口径 底径 器高	色 調	備考
121	10類	E-278	SK10	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄		181	"	" 225	"	11.8 — —	2.5Y ⅓ 灰黄	
122	"	" 284	SK15	— — —	2.5Y ⅓ 黄褐		182	"	" 233	"	12.6 — —	2.5Y ⅓ 灰白	
123	"	" 128	A区	— — —	7.5Y R ⅓ 明褐		183	"	" 103	SK57	— 11.0 —	2.5Y ⅓ にぶい黄	
124	11類	" 127	"	— — —	2.5Y ⅓ 黄褐		184	"	" 140	A区	— 6.1 —	2.5Y ⅓ 灰黄	
125	12類	" 223	B区	— — —	2.5Y ⅓ 黄褐	S-49	185	"	" 290	SK09	— 6.0 —	2.5Y ⅓ 淡黄	
126	"	" 150	A区	— — —	10Y R ⅓ にぶい黄橙	S-48	186	"	" 155	A区	— 6.1 —	2.5Y ⅓ 灰白	
127	"	" 252	C区	— — —	10Y R ⅓ 明黄褐	S-50	187	"	" 137	"	— 4.0 —	2.5Y ⅓ 浅黄	
128	"	" 222	B区	— — —	5 Y ⅓ オリーブ黄		188	"	" 158	"	— 5.2 —	2.5Y ⅓ 灰	
129	縄文土器	" 209	"	— — —	7.5Y R ⅓ 橙		189	"	" 211	B区	— 5.0 —	2.5Y ⅓ 浅黄	
130	"	" 174	A区	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄		190	"	" 58	SK52	— 4.0 —	2.5Y ⅓ 灰黄	
131	"	" 48	SK54	— 7.4 —	2.5Y ⅓ 浅黄		191	"	" 98	SK58	— 3.7 —	5 Y ⅓ 灰白	
132	"	" 148	A区	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄		192	"	" 296	SK22	— 4.4 —	5 Y ⅓ 淡黄	
133	"	" 47	SK03	30.1 — —	5 Y ⅓ オリーブ黒		193	"	" 143	A区	8.0 3.0 1.8	N ⅓ 灰白	
134	"	" 122	A区	— — —	10Y R ⅓ 明黄褐		194	"	" 260	C区	8.5 5.8 1.1	5 Y ⅓ 灰白	
135	"	" 70	SK41	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄		195	"	" 235	B区	7.8 — —	5 Y ⅓ 灰白	
136	"	" 94	B区	— — —	7.5Y R ⅓ 橙		196	"	" 248	C区	7.8 — —	5 Y ⅓ 灰白	
137	"	" 69	SK42	— — —	2.5Y ⅓ 黄褐		197	"	" 57	SB06B	10.0 — —	2.5Y ⅓ 淡黄	
138	"	" 63	SK44	— — —	10Y R ⅓ 明黄褐		198	"	" 97	SK59	— 4.2 —	5 Y ⅓ 浅黄	
139	"	" 89	SK39	— — —	10Y R ⅓ 灰黄褐		199	施釉陶器	" 236	B区	11.2 4.5 6.3	5 Y ⅓ 淡黄	
140	"	" 286	SK19	— — —	2.5Y ⅓ 黄褐		200	"	" 250	C区	— 4.0 —	2.5Y ⅓ 淡黄	
141	"	" 121	A区	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄		201	"	" 50	SB06B	— — —	5 Y ⅓ 浅黄	
142	"	" 59	SK53	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄		202	"	" 56	SB06B	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄	
143	"	" 65	SK27	— — —	10Y R ⅓ 明黄褐		203	"	" 216	B区	3.5 — —	2.5Y ⅓ 灰白	
144	"	" 130	A区	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄		204	"	" 214	"	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄	
145	"	" 193	B区	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄		205	"	" 251	C区	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄	
146	"	" 92	B区	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄		206	"	" 163	A区	— — —	10Y R ⅓ にぶい黄橙	
147	"	" 73	SK40	— — —	10Y R ⅓ にぶい黄橙		207	土師器	" 294	SK17	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄	
148	"	" 132	A区	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄		208	"	" 285	SK15	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄	
149	"	" 81	SK39	— — —	10Y R ⅓ にぶい黄褐		色調は（財団法人日本色彩研究所『標準土色帖』（1989年版））による						
150	"	" 83	SK39	— — —	10Y R ⅓ にぶい黄橙								
151	"	" 170	A区	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄								
152	"	" 204	B区	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄								
153	"	" 91	B区	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄								
154	弥生土器	" 105	谷	— — —	2.5Y ⅓ 黄褐								
155	"	" 109	"	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄								
156	"	" 110	"	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄								
157	"	" 117	"	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄	S-46							
158	"	" 107	"	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄								
159	"	" 106	"	— — —	2.5Y ⅓ 浅黄	S-44							
160	"	" 116	"	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄								
161	"	" 99	SK56	— — —	2.5Y ⅓ 黄褐								
162	"	" 114	谷	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄	S-45							
163	"	" 268	D区	— — —	7.5Y R ⅓ にぶい橙								
164	"	" 100	SK56	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄	S-47							
165	"	" 255	B区	21.7 — —	2.5Y ⅓ 浅黄								
166	"	" 33	SK01	— — —	2.5Y ⅓ にぶい黄								
167	土師器	" 118	SK60	14.0 — —	2.5Y ⅓ 浅黄								
168	"	" 51	SK08	14.4 — —	2.5Y ⅓ にぶい黄								
169	須恵器	" 119	SK60	— — —	10Y R ⅓ 黄灰								
170	"	" 254	C区	— — —	5Y ⅓ 灰白								
171	"	" 266	B区	23.3 — —	5 Y ⅓ 灰オリーブ								
172	灰釉系陶器	" 242	B区	— 9.4 —	2.5Y ⅓ 浅黄								
173	"	" 42	SK07	15.5 6.7 5.6	2.5Y ⅓ 淡黄								
174	"	" 55	SB06B	13.2 4.2 4.3	2.5Y ⅓ 淡黄								
175	"	" 44	SK35	12.0 3.0 3.6	2.5Y ⅓ 灰白								
176	"	" 256	C区	12.4 3.6 3.8	2.5Y ⅓ 灰白								
177	"	" 302	A区	12.7 — —	2.5Y ⅓ 淡黄								
178	"	" 102	SK57	12.7 — —	2.5Y ⅓ 淡黄								
179	"	" 40	SK04	14.8 — —	5 Y ⅓ 灰白								
180	"	" 210	B区	14.0 — —	5 Y ⅓ 灰白								

図版 番号	名 称	登録 番号	出土位置	石 質	長土 幅 厚さ 重量	備考
209	磨製石斧	S 14	S K45	変塩基性岩	16.2 5.0 3.5 508 g	
210	打製石斧	18	A区	安山岩	11.8 4.3 2.2 134 g	
211	〃	31	B区	〃	11.8 3.8 2.7 140 g	
212	〃	15	S K61	〃	10.3 3.9 1.8 84 g	
213	〃	20	A区	〃	10.3 3.1 1.8 64 g	
214	〃	30	B区	〃	7.9 3.4 1.9 70 g	
215	〃	17	A区	貢岩	11.0 4.7 1.1 62 g	
216	〃	19	A区	安山岩	6.2 3.3 1.2 32 g	
217	〃	29	B区	〃	7.7 4.6 1.6 61 g	
218	〃	8	A区	ハンレイ岩	8.8 4.9 1.5 80 g	
219	〃	28	B区	溶結ギョウ ライ岩	8.5 4.2 1.7 73 g	
220	石鍾	33	B区	雲母片岩	6.0 6.0 2.5 134 g	
221	磨石	24	A区	花崗岩	6.1 5.1 5.0 196 g	
222	〃	25	A区	〃	10.2 6.8 6.7 496 g	
223	〃	10	S K53	〃	9.4 5.9 5.3 282 g	
224	〃	4	S B01土坑1	〃	11.6 6.7 6.7 670 g	
225*	スライバー	26	A区	チャート	4.8 2.6 2.5 17 g	
226	石鏃	1	S B01	黒曜石	1.6 1.0 0.7 4 g	
227	〃	2	S B01	〃	1.4 1.4 1.2 6 g	
228	〃	27	S K10	貢岩	1.6 1.2 1.0 8 g	
229	〃	7	S K07	黒曜石	1.5 1.4 1.1 10 g	
230	〃	34	S K50	〃	2.0 1.7 1.6 15 g	
236	石皿	35	S K10	花崗岩	32.0 26.0 8.0 11.6kg	
231	銭貨	M-1	S K02			
232	〃	2	〃			
233	〃	3	〃			
234	〃	4	〃			
235	〃	5	〃			
236	彈丸	6	B区			

圖版



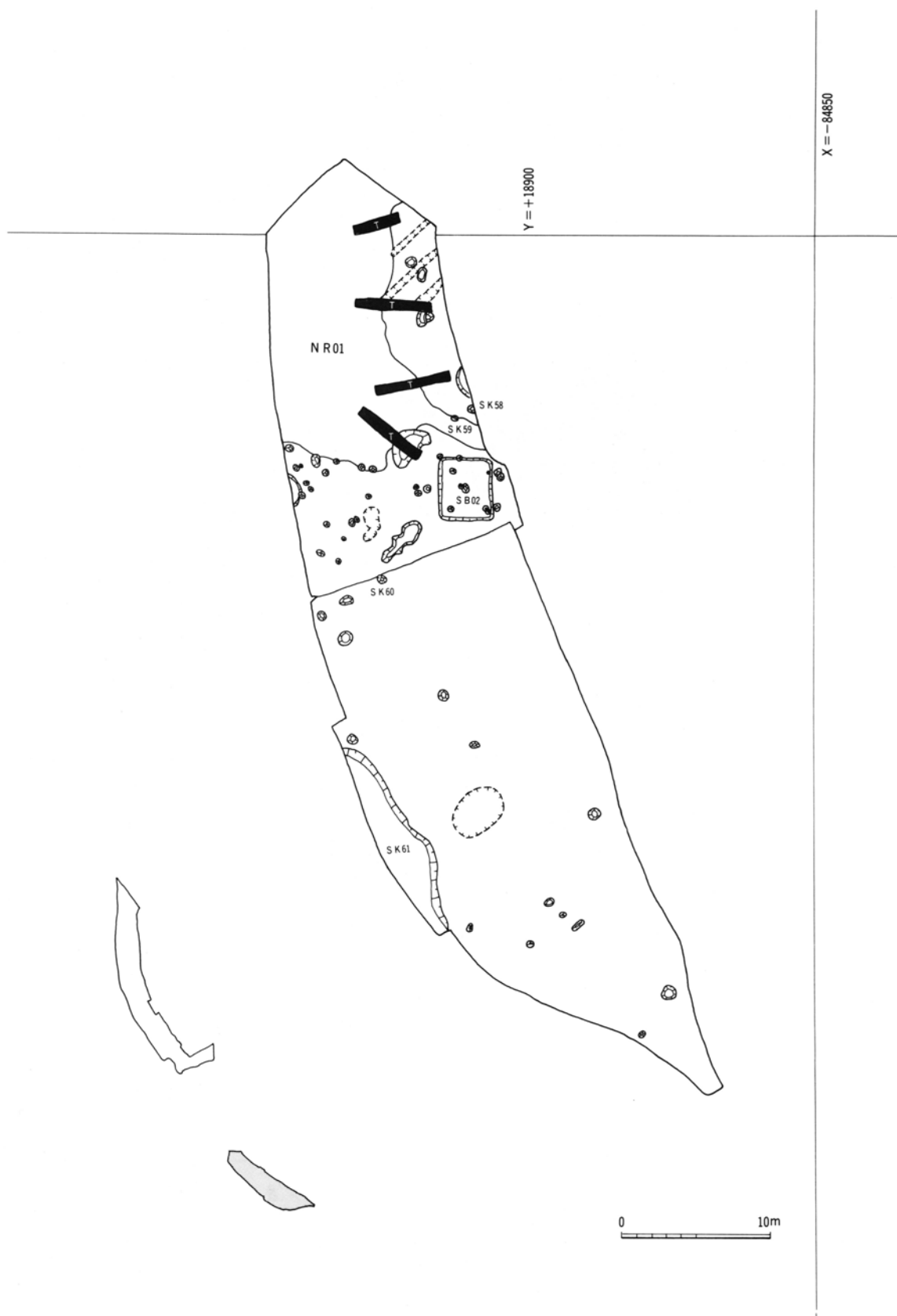
図版1 遺構図①



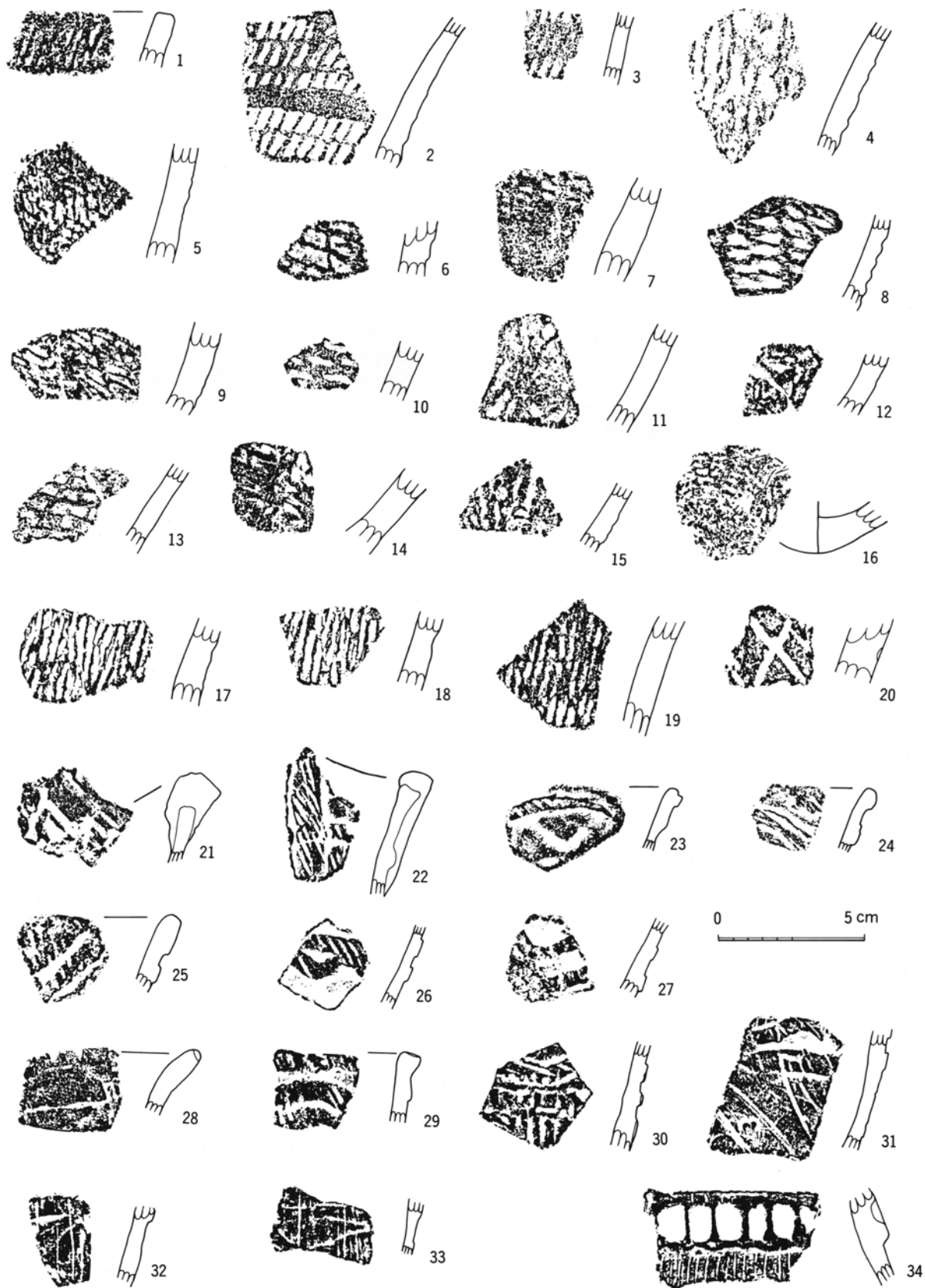
図版2 遺構図②



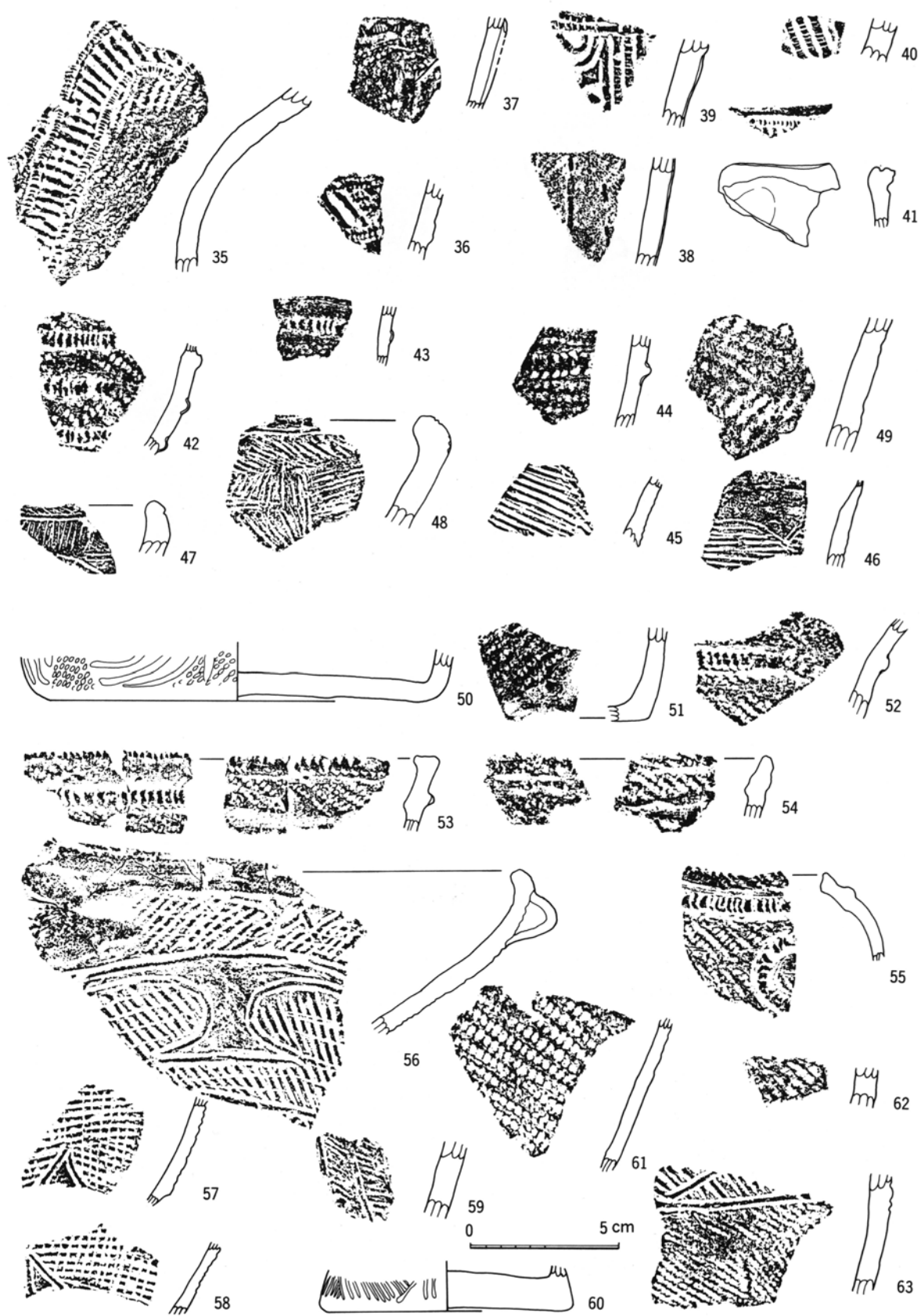
図版3 遺構図③



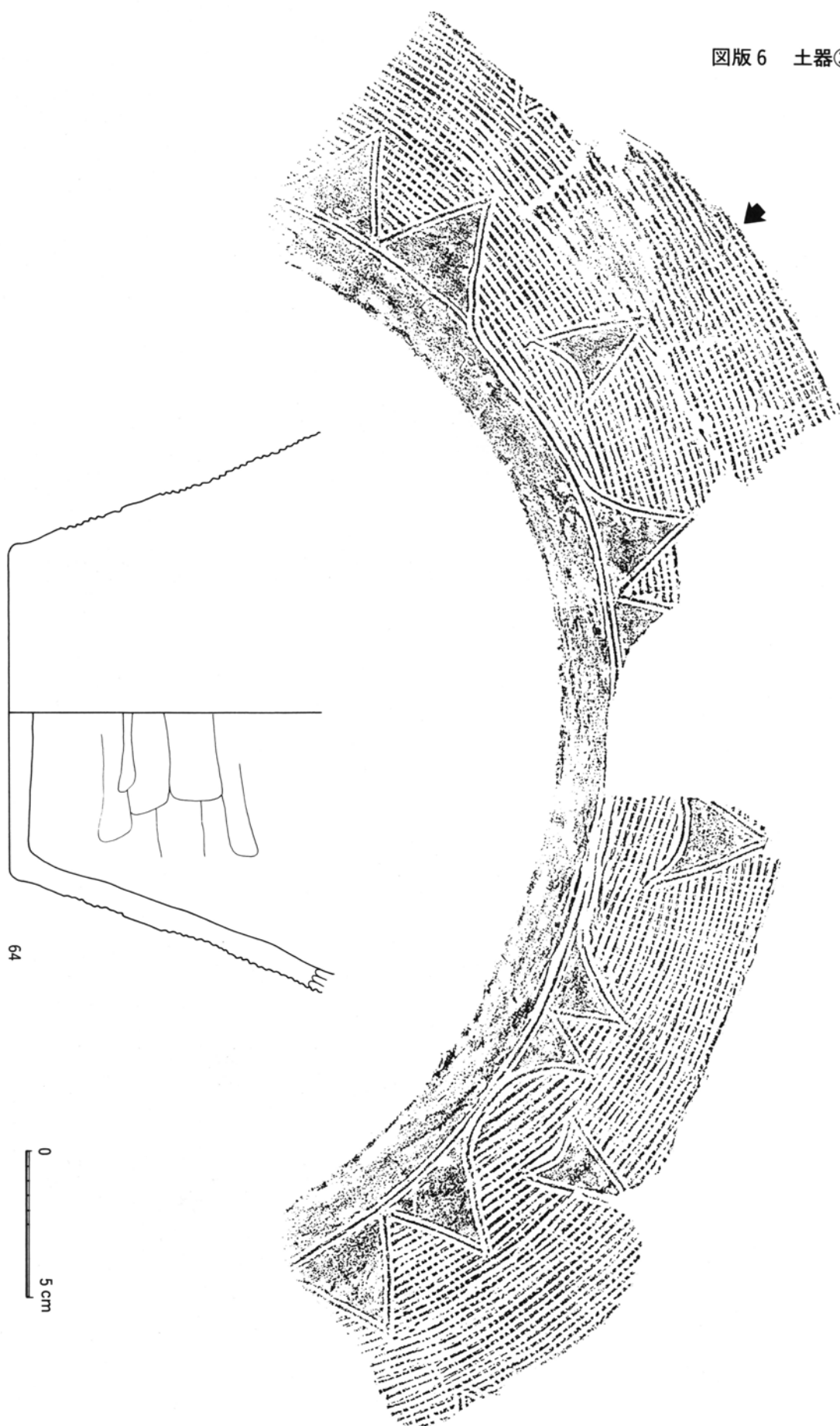
图版 4 土器①



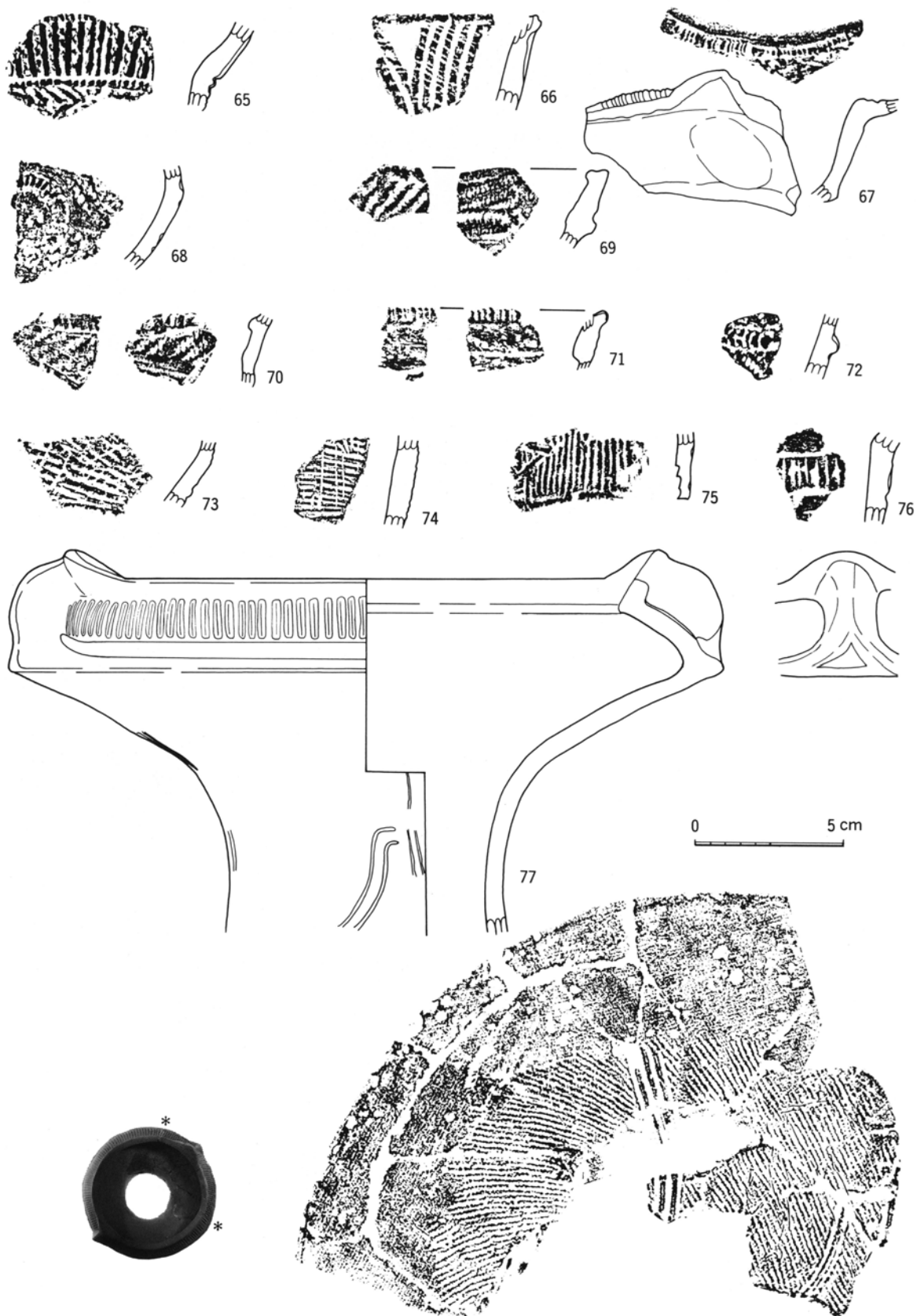
图版 5 土器②



图版 6 土器③



图版 7 土器④



图版 8 土器⑤



图版 9 土器⑥



108



109



110



111



112



113

0 5 cm



114



115



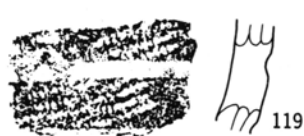
116



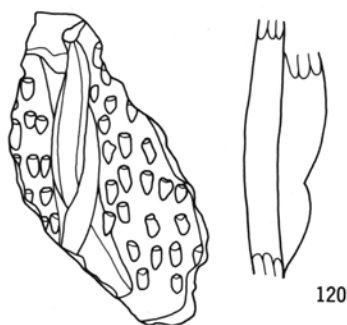
117



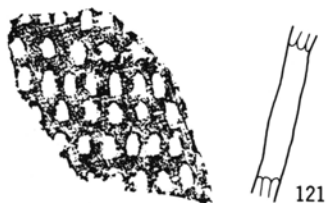
118



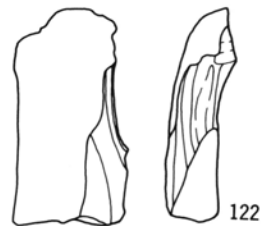
119



120



121



122



123



124



125



126



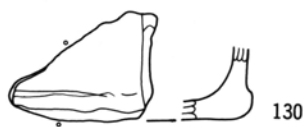
127



128



129



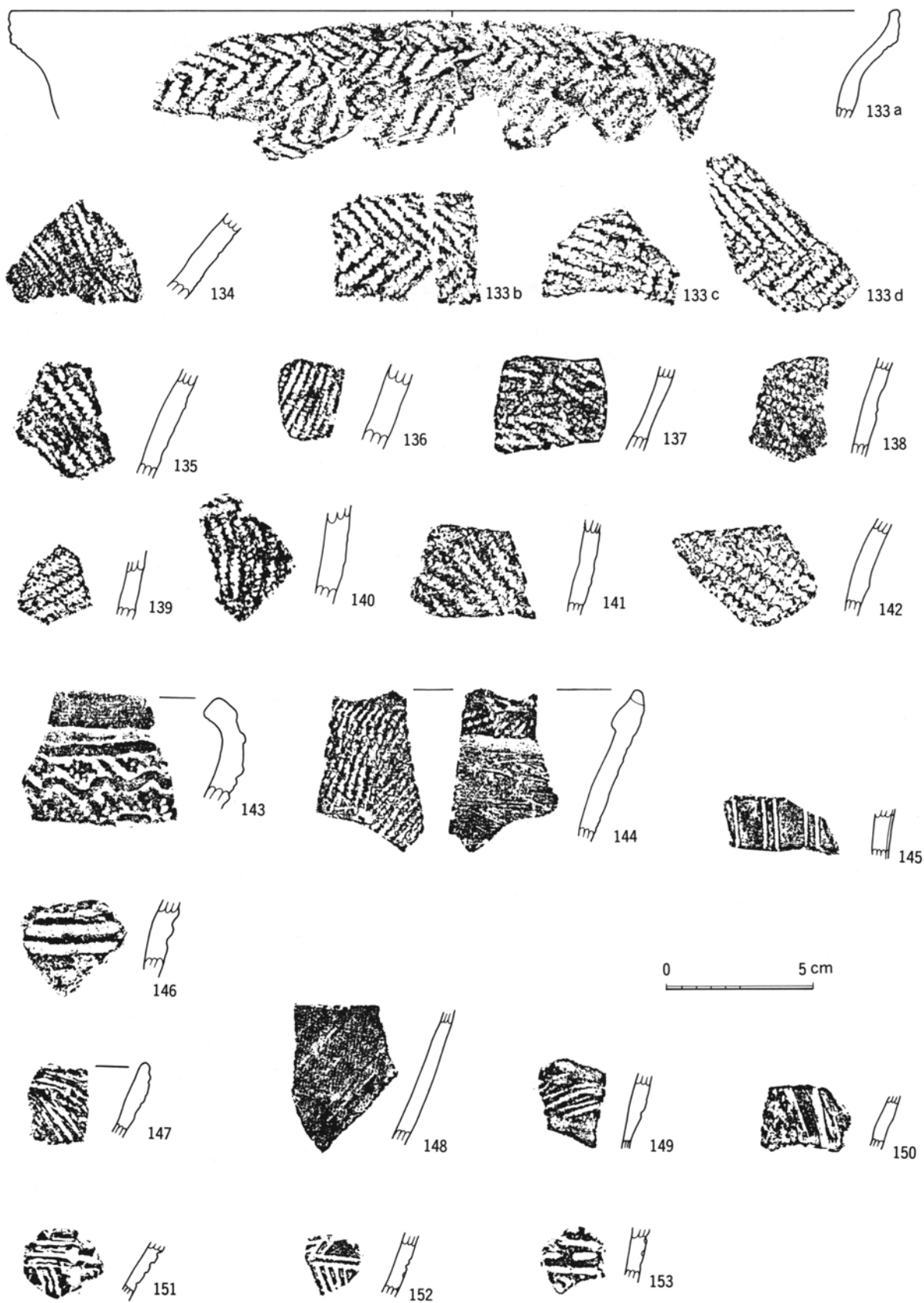
130



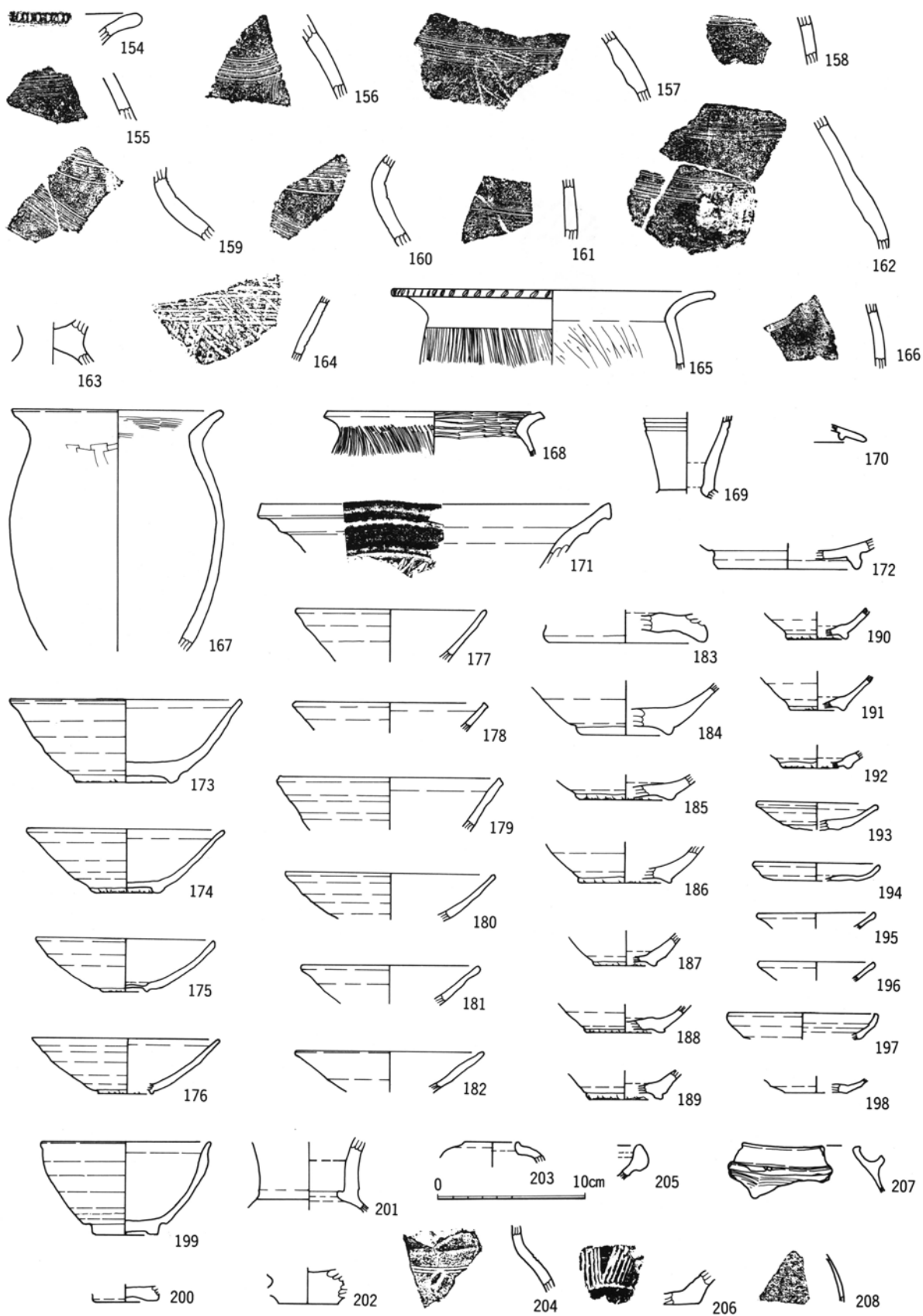
131

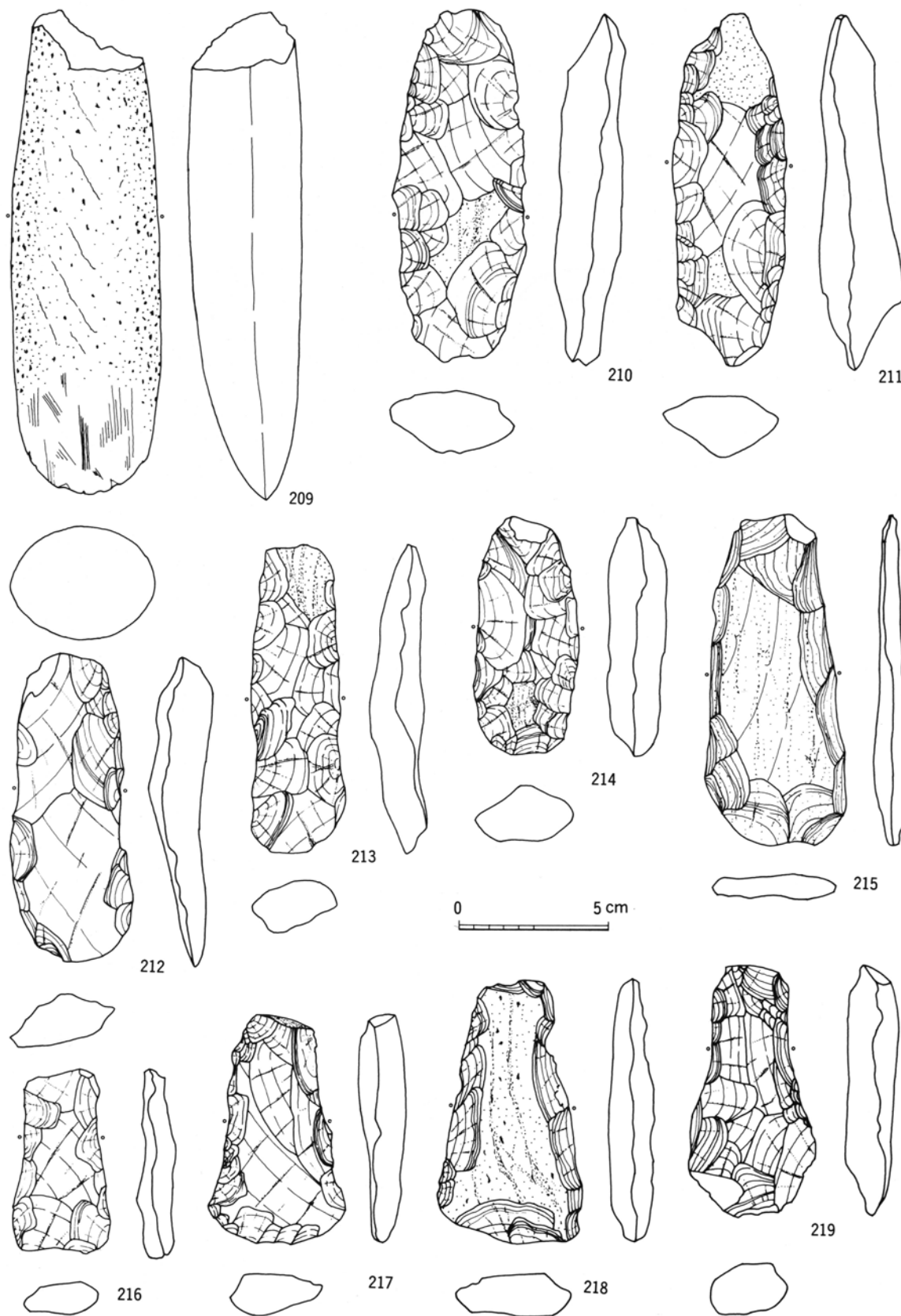


132

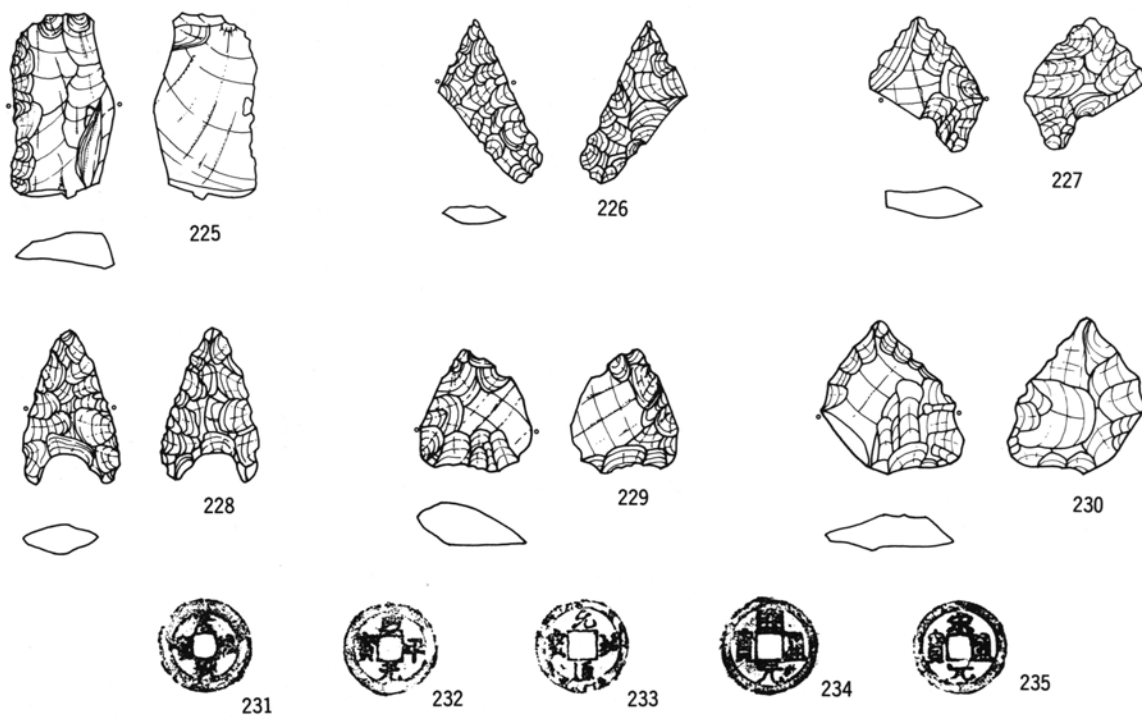
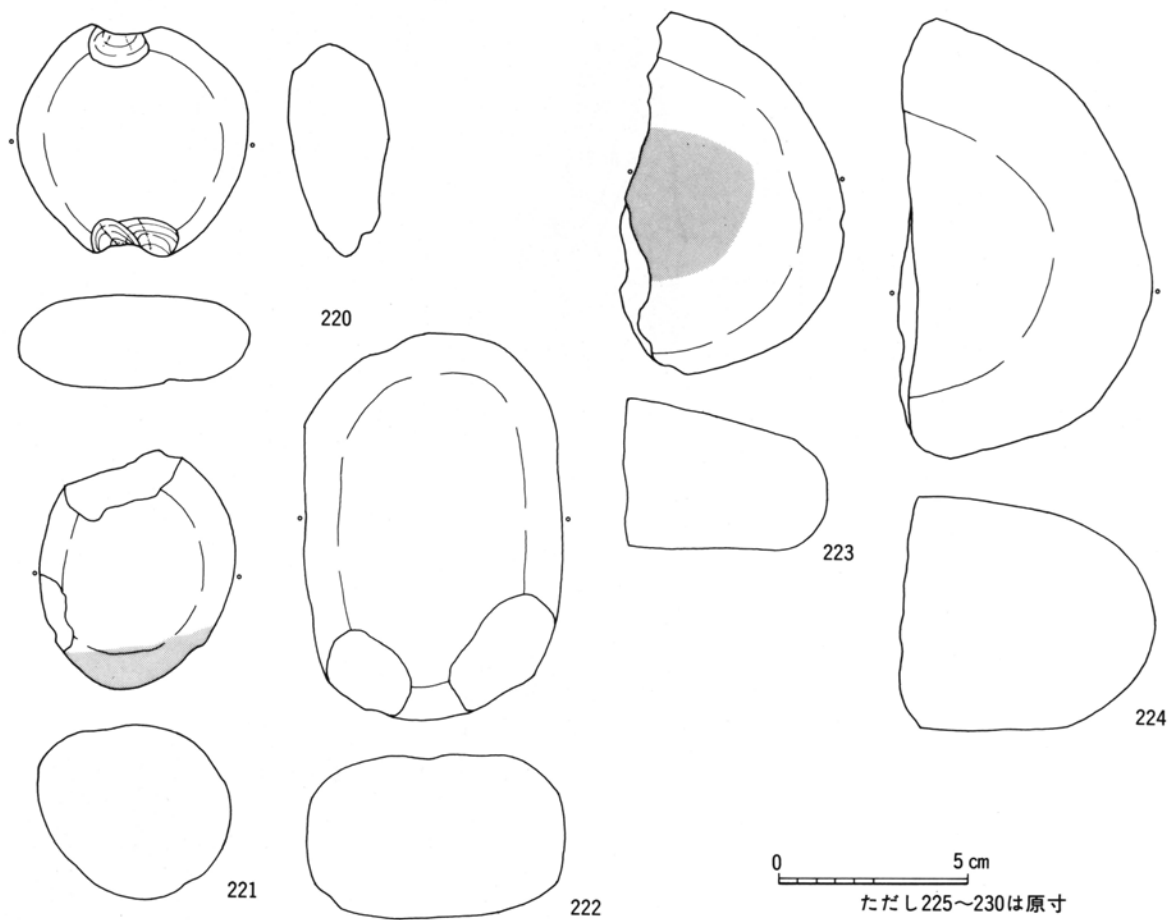


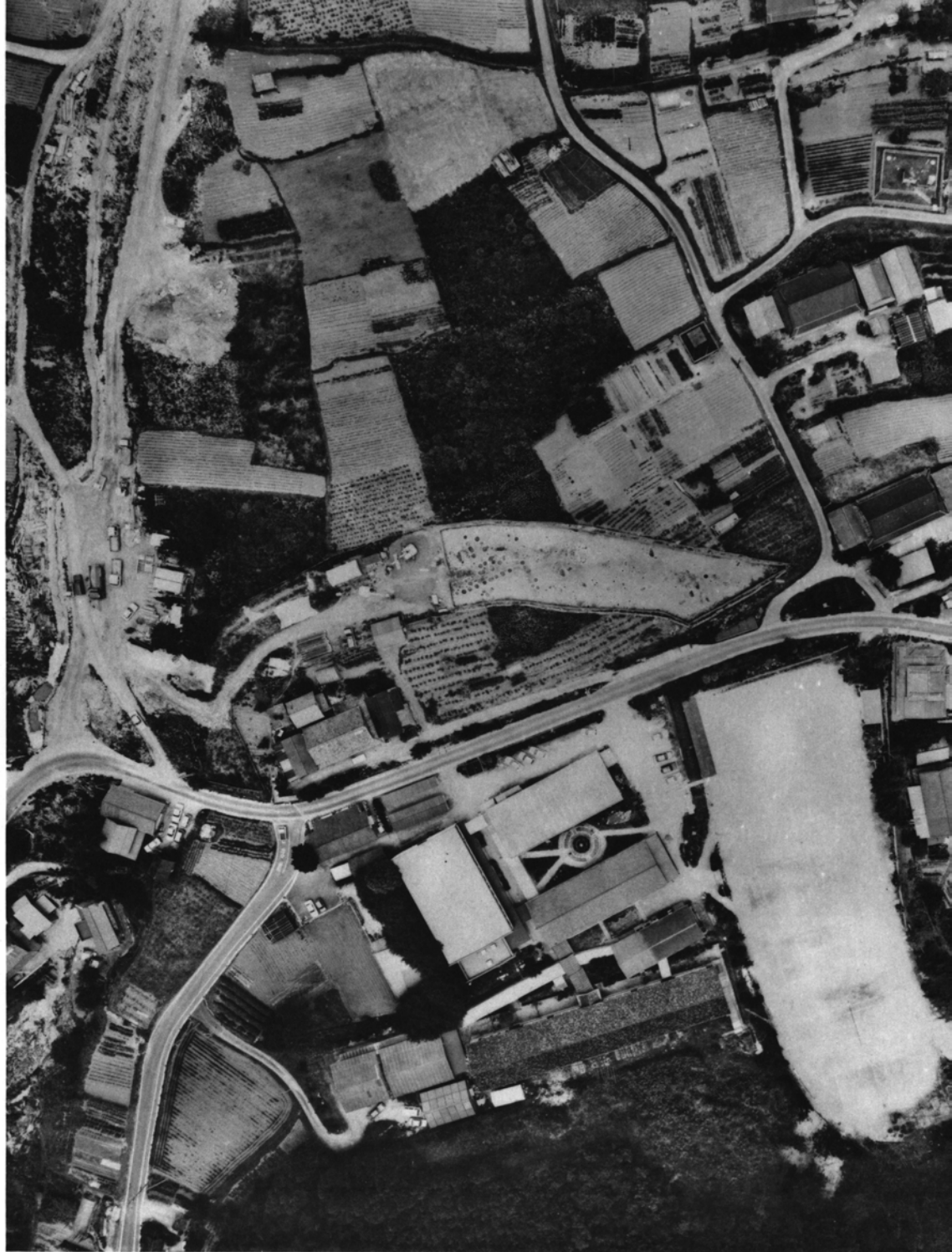
图版11 土器⑧





図版13 石器・銭貨





A区全景



B区全景



D区全景



C区全景



A区（西から）

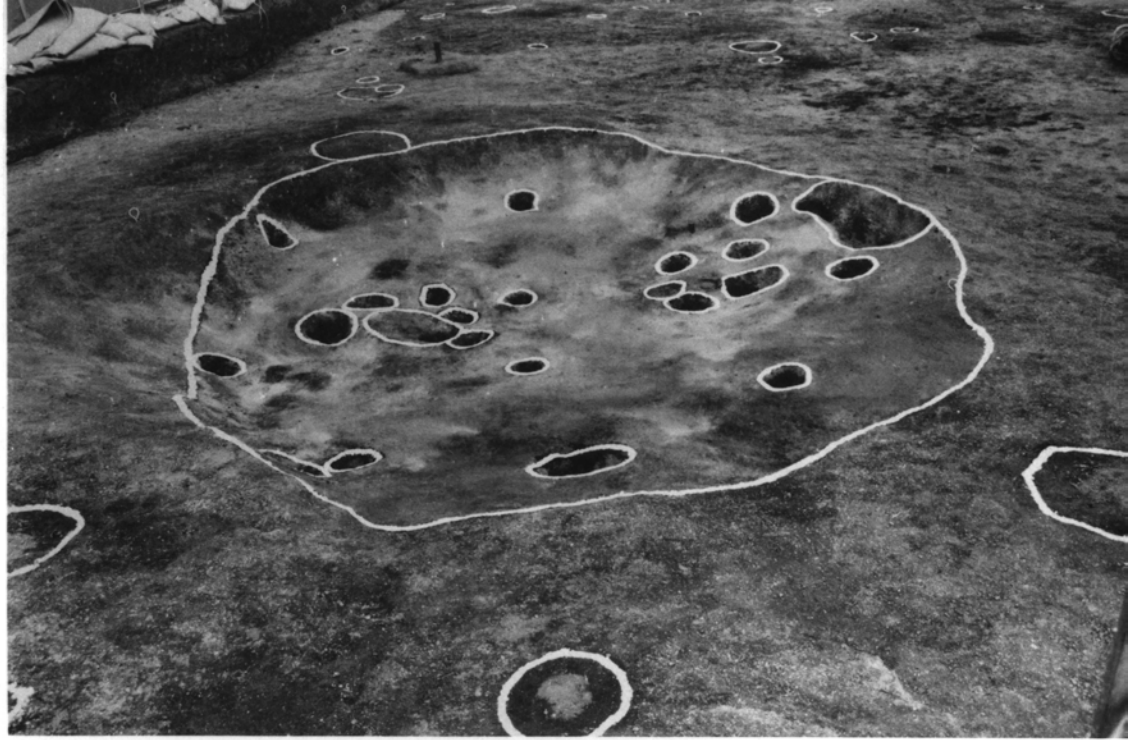


C区（西から）

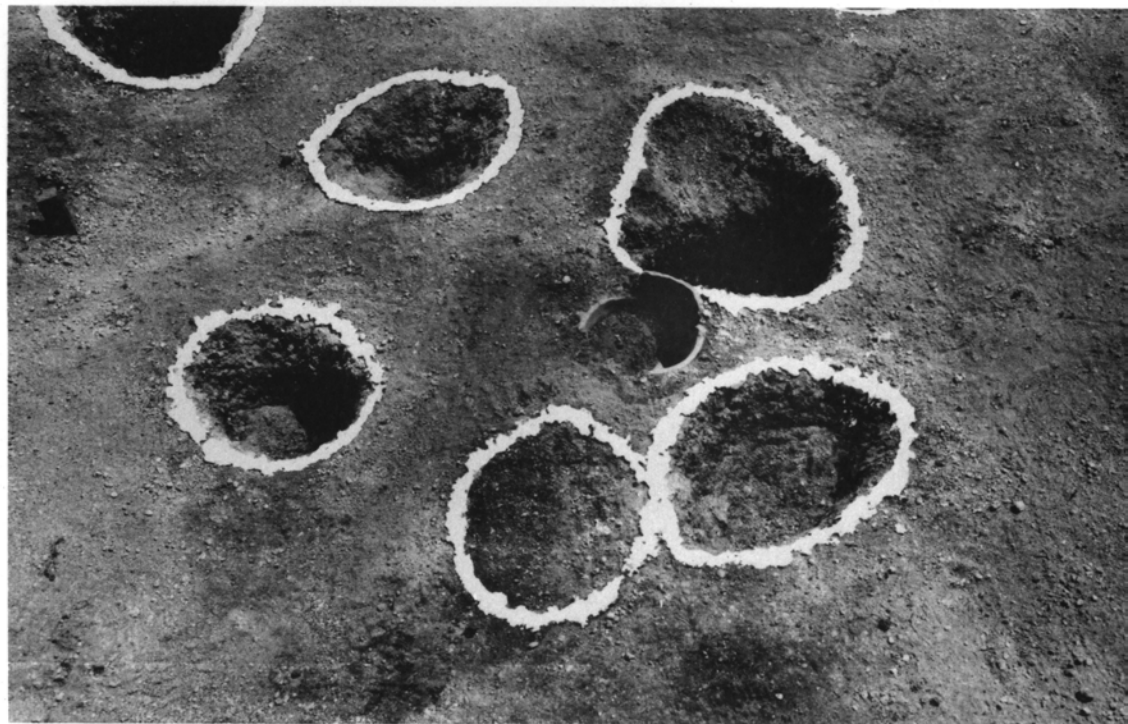


B区掘立柱建物
（東から）

SB01 (西から)



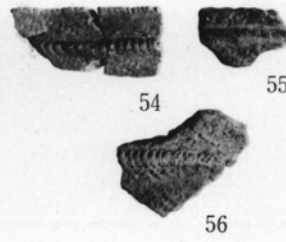
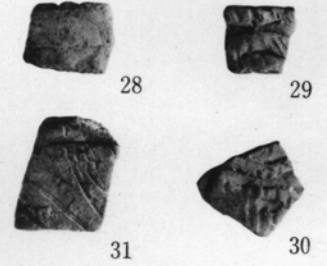
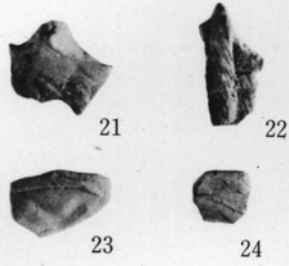
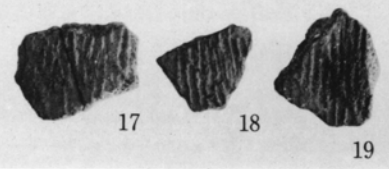
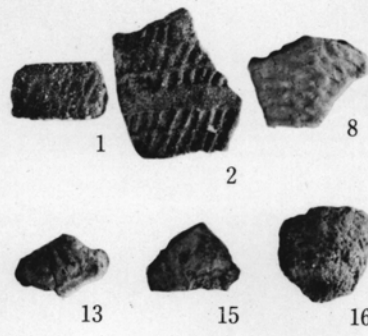
SB01
炉1号 (東から)



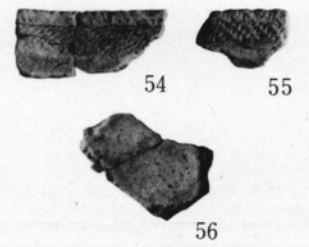
SB02 (西から)



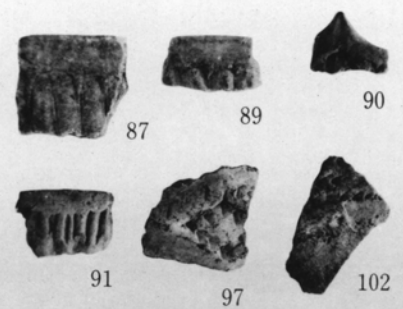
図版18
土器



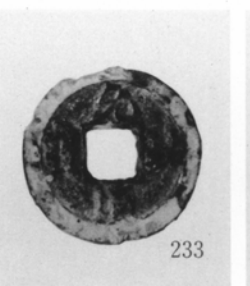
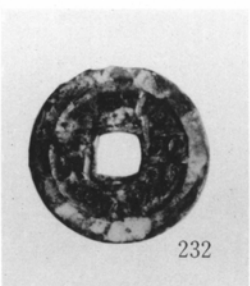
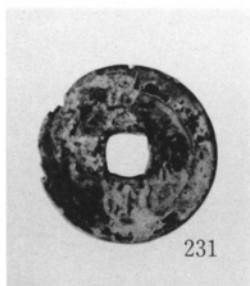
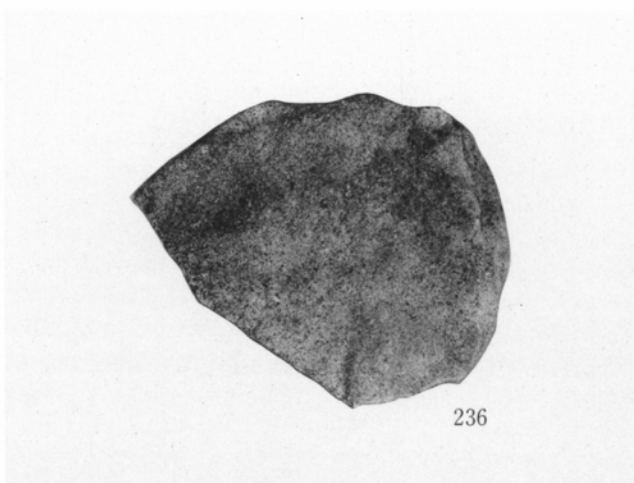
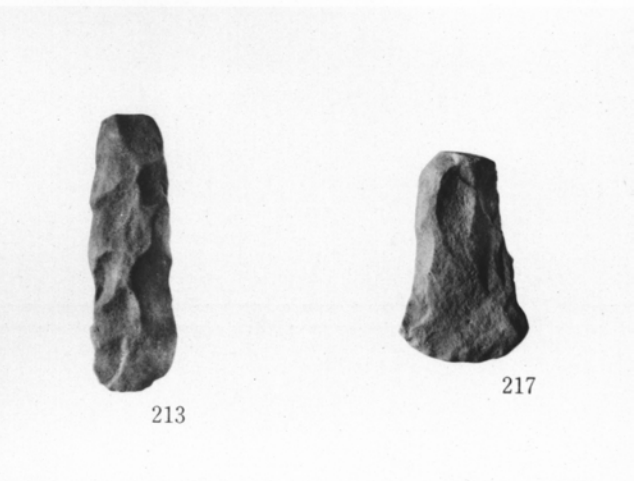
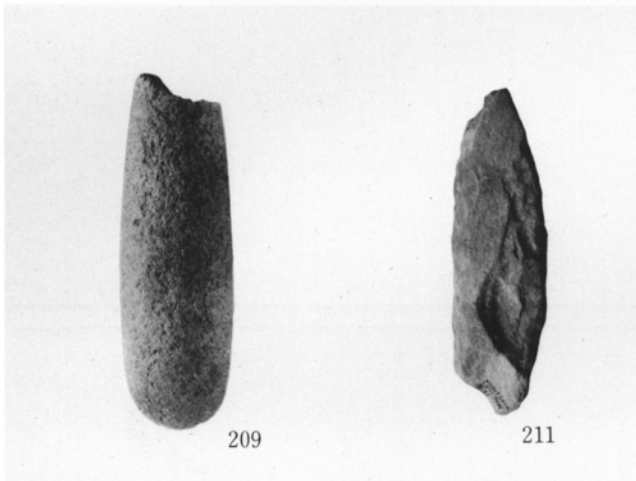
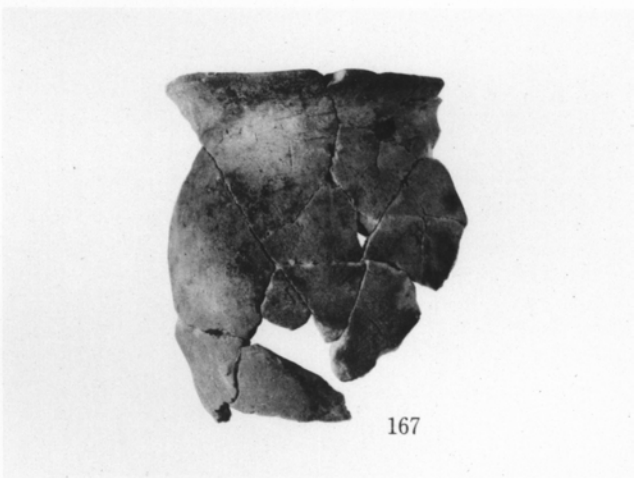
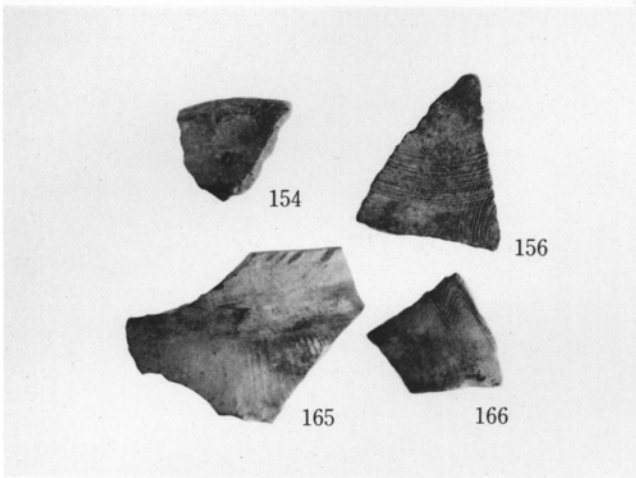
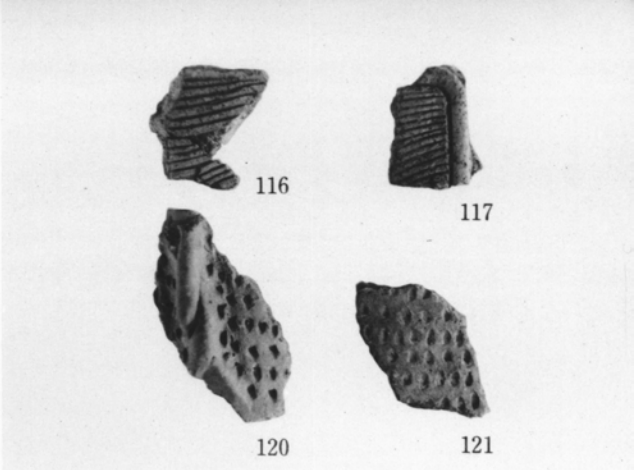
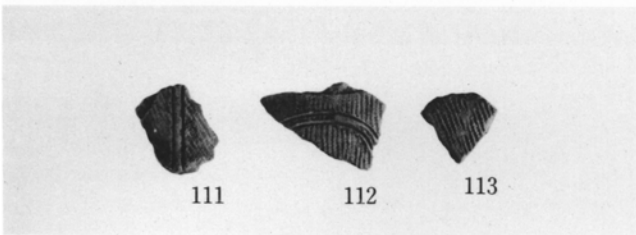
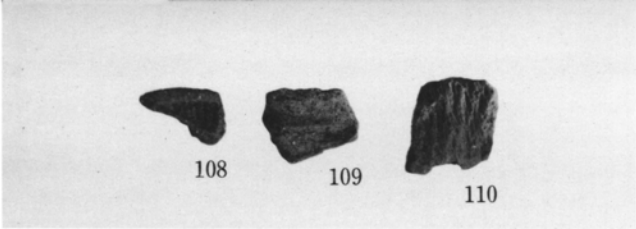
(外面)



(内面)



64 77を除き
ほぼ $\frac{1}{3}$
64 77はほぼ
 $\frac{1}{4}$



167 236を除き
ほぼ1/3
167はほぼ 1/4231~235は
ほぼ原寸

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第39集

上 万 場 遺 跡

1992年 3 月31日

編 集 財団法人
発 行 愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 西 濃 印 刷 株 式 会 社